INTERVIEW ● 小柴恭男さん

ナチスの歌を歌い、竹やりと手榴弾を手にした少年期。疎開先では食べ物に本当に苦労しました。

インタビュアー

須藤康夫（すどう・やすお）
慶應義塾大学1年生
21歳

池上沙衣（いけがみ・さえ）
上智大学2年生
20歳

髙橋麻里奈（たかはし・まりな）
東京学芸大学2年生
20歳

銃後・・・前線に対して、戦場の後方の意。直接は戦争に参加していない一般国民や国内。

高輪で幼少期を過ごされた小柴恭男さんは、高輪台尋常小学校在学中に戦争が始まり、中学1年生の12月に群馬県北甘楽郡吉田村（現・富岡市）へ疎開されました。当時の小学校での戦時教育、疎開先での厳しい生活、終戦後の東京で目の当たりにしたショッキングな現実……。小柴さんが語る数々のエピソードには、聞き手の学生たちからも驚きの声が上がっていました。

ヒットラーユーゲントの歌を歌った小学生時代

池上 ――まずは少年時代について伺いますが、学校生活にも戦争の影響は大きかったのでしょうか。

小柴 ――戦争が始まってからは、私たちも戦争一色でした。小学生といえども〝少国民〟ですから、アメリカやイギリスは敵国で、枢軸国のドイツとイタリアは仲間だという気持ちを強く植え付けられたんですね。

ナチスのヒットラーユーゲント（ナチス党・青少年教化組織）が、「ハイル・ヒットラー！」などと整列している映像を見たことがありますよね。日本の小学校でも、同じことが行われていたんですよ。「天皇陛下万歳！」と。高輪台尋常小学校にヒットラーユーゲントが来た時には、歓迎でヒットラーユーゲントを讃える歌を歌いました。「バンザーイ　ヒットラー　ユーゲント　バンザーイ　ナーチース……」

戦争体験者　小柴恭男（こしば・やすお）さん　（84歳）

昭和6（1931）年、高輪生まれ。高輪台尋常小学校から東京市立多摩中学校に進み、1年生の12月に群馬県北甘楽郡吉田村へ縁故疎開。群馬県立富岡中学校に編入し、戦後も群馬に残り新制・富岡高等学校を卒業。東京へ戻り、東京都立大学に入学。現在も港区に居住。著書『欲しがりません　勝つまでは』を自費出版。

※マンガは、現代の若者が戦争・戦災を追体験するというコンセプトで描かれています。

戦地の兵隊さんに、慰問文を書く授業もありましたよ。「僕たち少国民は元気にしていますから、兵隊さんよろしくお願いします」などと手紙を書き、慰問袋に入れて送るんです。返事が来るのは3人に1人ぐらいなのに、僕のところにはたまたま返事が来て、すごく嬉しかったなぁ。太平洋戦争が始まってからは書いた記憶がないので、戦局が悪化するまでの話ですね。楽しみだった女子生徒との合唱コンクールが中止になるなど、戦況の変化は学校行事にも影響し始めました。

中学では、音楽の授業でもドイツの歌を教わりました。教科書には載っていない「園の小百合撫子」（故郷を離るる歌／原曲：Der letzte Abend）という歌で、先生が学校を辞められるため、最後の授業で歌ってくれました。まだ若い女性の先生で、僕らの憧れだった方なんですよ。その後は慰問団に加わり、満州へ行かれたそうですが……。

池上 ―― **出征する方の見送りをされた経験はありますか？**

小柴 ―― ありますよ。近所のみんなで日の丸を振り、「勝ってくるぞと勇ましく」などと歌いながら、「万歳！　万歳！」と。僕はまだ小学生でしたから、面白がって一生懸命に旗振り役をしました。出征する家ではお赤飯を炊き、おにぎりにして配ってくれるのも楽しみでした。

見送りは町内でしました。多くは20代後半から30代の父親なので、小さい子を置いて出征するわけです。赤ちゃんを抱いた奥さんが泣きそうな顔で見送る中、伊皿子の町内からは一度に1人ずつ見送りしていました。

皆さんは、千人針をご存じですか？　千人の女性が布に赤い糸で結び目をつけ、それを腹巻きなどに巻けば弾に当たらないという。街中でも「お願いします」と声をかけている光景を見かけましたが、千人分を集めるのは、本当に大変だったでしょうね。僕のような子どもにまで、慰問袋に千人針を入れるようお願いされたけれど、女の子の友達などいなかったので……。出征する方のお母さんでしたが、頼むほうも必死ですよ。うちの母も、多いときは1日10人ぐらいに頼まれていましたから。

「軍艦マーチ」から「海行かば」へ 戦局の悪化を感じた大本営発表

池上 ―― 太平洋戦争開戦時の世の中は、どのような雰囲気でしたか？

小柴 ―― 「日本は大したものだ！」と大騒ぎでしたよ。ラジオの大本営発表では「軍艦マーチ」（軍艦行進曲）が威勢よく流され、それはもう景気がいい。新聞は五段抜きの大見出しで報じ、国民全員が戦勝ムードでしたね。

池上 ―― 戦争が本格化し、食生活などにも変化はありましたか？

小柴 ―― 当時の港区では、それほど困った印象がないんですよ。東京でも地域格差があったらしく、恵まれていたんでしょう。もちろんお酒や煙草といった嗜好品は配給制で、女性のパーマは禁止、振り袖などとんでもない、もんぺをはけ、防空頭巾をかぶれ……など、衣装の規制は多かったですが。「奢侈に走るな」が、当時のモットーでしたから。

そうはいっても食べ物が豊富だったわけではないので、真珠湾攻撃の12月8日にちなみ、8の日は（学校に持って行く弁当を）日の丸弁当で食べ物を節約する決まりでした。母が海苔やカツオ節をご飯の間に挟み、表からは梅干し1個だけに見えるよう工夫してくれましてね。先生が〝弁当におかずが入っていないか〟をチェックするので、隠す必要があったんですよ。

池上 ―― ラジオや大人たちの会話から、戦況の悪化を感じることはありましたか？

小柴 ―― 何となく、わかりました。例えば、よく耳にする曲が「軍艦マーチ」から「海行かば」に変わっていったように。大本営発表で「我が方の損害軽微なり」といわれても、その後に寂しげな「海行かば」が流れるとね、ちょっとおかしいのでは？　と。本当は聞くことが禁止されていたラジオの短波放送（アメリカの日本語放送）でも、中国の戦況を具体的に伝えていましたし。

池上 ―― その後、港区でも空襲が始まった昭和19（1944）年末頃には、群馬県に疎開されていたのですよね。

小柴 ―― 東京に残った父の話では、我が家にも焼夷弾が落ち、「火はたき」（当時の消火器具）で叩き落としたので延焼せずに済んだとのことです。

たまたま疎開先から自宅に戻った際、空襲警報が鳴り、防空壕に入ったことはありました。各家に防空壕を作れるほど広い庭があるわけじゃないので、10軒に1軒ぐらい、大きな家に作られていて。隣組のみんなで、そこへ一緒に入るんですよ。

髙橋 ―― どれぐらいの広さだったのですか？

小柴 ―― 間口が2間（約3・6メートル）、奥行きが4間（約7・2メートル）ほどでしたかね。深さは2メートルぐらい。近所のみんなが総出で掘った穴に丸太を組み、完成までに1カ月ほどかかりました。小学生だった私は、土をバケツで運ぶぐらいの手伝いしかできませんでしたけれど。

うちは工場で、天皇陛下に納めるお風呂用電気湯沸かし器なども作っていたんですよ。それが空襲で壊れては大変だと、防空壕に保管していました。

食料とよそ者扱いに苦労した疎開生活 竹やり攻撃の軍事教練に疑問も

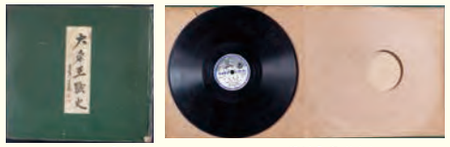
須藤 ―― 群馬県に疎開された経緯も教えていただけますか？

小柴 ―― 昭和19年、小学生の集団疎開が行われた頃、父の出身地・群馬に親戚がいるからと、僕は縁故疎開をしました。一戸建ての家を借りることができましたし、恵まれていたほうだと思います。

一緒に疎開したのは母と妹と弟で、父は工場があるため東京に残りました。日本光学工業株式会社（現在の株式会社ニコン）からの発注で、爆撃機用の爆弾固定装置が凍結しないための電熱器を作る主力工場になっていましたから、離れるわけにはいかなかったんですよ。大学入学で東京に戻るまでは、父と離ればなれ

コラム 7 ● 軍歌（ぐんか）

軍隊の士気を高め、愛国心を奮い立たせるために作られた歌。日本では明治維新・西南戦争の頃から歌われ始め、日清・日露戦争から第二次世界大戦時にかけて多数愛唱された。海軍省の制定行進曲で大本営発表の海軍の戦勝放送時に流された「軍艦行進曲（軍艦マーチ）」、陸軍の戦勝放送に用いられた「敵は幾万」、陸軍守備隊が玉砕時に歌ったという「海行かば」、陸軍行進曲の「抜刀隊」（元々は、西南戦争時の警視庁抜刀隊の活躍を歌ったもの）などが知られる。戦後はGHQにより演奏・放送などが禁止されたが、広く庶民に親しまれた「月月火水木金金」は歌い継がれ、ザ・ドリフターズによる替え歌が大ヒットした。



軍歌などが収録されたレコード集「大東亜戦史」（提供：平和祈念展示資料館）

の生活を送ることになりました。

疎開先は吉田村だったのですが、群馬県の西南部は田んぼが少なくて、畑がほとんどなんですよ。しかも浅間山の噴火で降り積もった火山灰土壌なため、多く作れるのはネギとコンニャクぐらい。下仁田のネギやコンニャクは有名ですけれど、お米が作れない土地だから、そうした名産品が生まれたんでしょうね。

なので、食べ物には本当に苦労しました。300平方メートルあたり5〜6俵しか穫れないお米も、4俵は戦地用に供出するため、農家の分だけでも足りない。東京から数百人も来れば、米不足になって当然ですよ。麦7割・米3割のご飯ならマシなほう。イモ3割・麦6割・米1割ぐらいが当たり前でした。サツマイモのツルまでお米に混ぜて炊くのだけれど、おいしくないんですよね。むしろ、少し穫れる小麦で作った、うどんが重要な食料でした。1日3食うどんの日もありましたから。

須藤 ―― **米や野菜が東京にいた頃よりも不足していたとは、意外です。他にも困られたことはありましたか?**

小柴 ―― ご飯を炊くための、燃料や薪がなかったことですね。山で枯れ枝を集めようにも、近場は拾い尽くされているため、山奥まで行かなければならない。何とか籠いっぱいに集めても、今度はかまどで使うのが大変なんですよ。細くて小さい枝だから、(火力を維持するため) 火箸でかき集めてはフーフーと息を吹きかけ……。ご飯を炊くだけでも、一苦労でした。

当時の学校には二宮金次郎の銅像があったので、それを眺めながら「僕も同じようなものだなぁ……」と思ったものです。もっとも、籠を背負って山の急斜面を下りながらでは、本を読むことなどできなかったですけれどね。二宮金次郎とは、なんと立派な人だったのかと思いましたよ。

池上 ―― **中学校では軍事教練もあったそうですが、どのようなことをするのですか?**

小柴 ―― 当時は空襲が激化し、大本営までが長野市の松代に疎開を準備するような状況でしたからね。富岡にも陸軍施設が移転してきたので、「本土決戦になれば敵が必ず攻めてくる」と、竹やりを手渡されました。「エイヤーッ」と、斜め上方に突く訓練を何度もさせられて。

髙橋 ―― **本当に竹やりで戦えると思ったのでしょうか。**

小柴 ―― いや、中学生ながらに、「これはちょっと無理じゃないか」と思いましたよ。竹やりでB29や銃を相手にしろと言われても……。でも、そんなことを口にしたら大変なので、真面目に「エイエイ!」と。男は竹やり、女学生はなぎなたの教練を続けました。

恐ろしかったのは、布で包んだ手榴弾を2個、持たされたことですね。一つは敵兵に向けて投げろ、もう一つは自決用だと。本物の手榴弾は(見本として)手に触らせるだけで、あとは河原へ行き、「手榴弾と同程度の重さ・大きさの石を見つけて、向こうの枯れ木を敵兵だと思って投げろ」ですよ。あの訓練は、本当に嫌だった……。

他にも、中学ではいろいろと複雑な思いをしました。地元で権威がある中学に、無試験で編入してくることへの風当たりも強かったですからね。校長の元へ挨拶に行った際も、「貴様は卑怯だ。疎開は逃避だ。逃避してきた人間など受け入れられるか」などと言われたり。東京の生徒は基礎学力が高く成績も良いため、余計に反感を買ってしまうんですね。

須藤 ―― **群馬と東京で、戦争に対する考え方などに違いはあったのでしょうか。**

小柴 ―― それは同じですね。疎開者との間に溝があっただけで。一番悔しかったのは、お正月明けのお弁当かな。地元の生徒は、お餅を何枚も持って来るんですよ。海苔を巻いたりして。でも、自分らのお餅は4分の1枚ぐらいしかない。見かねた同級生が分けてくれましたが、ありがたさと屈辱感がごっちゃになりながら食べたことをよく覚えています。

髙橋 ―― **仲違いばかりしていたわけではないのですね。**

小柴 ―― 人間とは不思議なもので、1〜2年もすれば親しくなれるんですよ。中学を卒業する頃には、みんな仲良くなっていました。編入から1年ぐらいの間で

すね、いろいろあったのは。群馬の仲間とは、今も年に一度ほど集まっていますよ。群馬の生活で自分が強くなったことは確かですし、今となってはいい思い出です。

米軍の占領政策と戦後の生活に〝敗戦〟を実感させられた日々

須藤 ―― 終戦は群馬で迎えられたのですよね。

小柴 ―― 8月15日は父が群馬に来ていたので、2人で山へ開墾に行き、蕎麦の実をまいていました。で、夕方になって戻ると、みんなが何やらひそひそ話をしている。妙だなと思いつつ帰宅してみれば、母から戦争に負けたと聞かされて。父は、その場でヘナヘナと倒れてしまいました。夕食も取らず、起き上がれないほどショックを受けたようです。

僕は父と違い、その日の夕食でうどんをおかわりするほど元気でした。それよりショックだったのは、戦後のインフレ（新円切り換え）ですね。銀行預金が封鎖され、それまでの10円札や100円札は、お札に証紙を貼り付けなければ使えなくなってしまった。糊がないからご飯粒で証紙を付けようにも、麦ご飯の粒ではパサパサしていて、すぐに剥がれてしまう。証紙用の糊にするため、米粒を探すのに苦労したものです。

髙橋 ―― 戦後も群馬に残られたそうですが、すぐ東京に戻ろうとは思わなかったのですか？

小柴 ―― いや、僕も母も戻りたかったんですよ。ただ、東京の無残な姿を目の当たりにした父がね、とても子どもが生活できる環境じゃないからと反対したんです。

当時の東京は、例えば道路の第一京浜と第二京浜が〝A-Avenue〟や〝B-Avenue〟という名称に変えられたように、アメリカ軍の思うままだったんですよ。C-Avenueは目黒通り、D-Avenueは駒沢通り。まさに占領政策ですね。

10代の女の子が街を歩いていたら、アメリカ兵にジープで連れ去られてもおかしくない状況でもありました。小学校の同学年で、あこがれだった女の子も、乱暴された後に自殺してしまいましたから……。日本の警察は無力ですし、正直、アメリカにいい感情は抱けませんでした。

手紙も、アメリカ軍がすべてチェック（開封）していました。チェックした手紙にはシールを貼って再封印するのだけれど、このシールがすごくきれいで、剥がれない。アメリカの科学力はすごいなと、そこは子どもながらに感心したりもしました。

髙橋 ―― 「戦争が終わった」というより、「戦争に負けた」ことが日常だったのですね。

小柴 ―― そうですね。上野公園あたりに行くと浮浪児が群がって、小銭をねだってくる。いくら小銭があっても足りないほど、大人数で。電車のガード下では子どもたちが靴磨きをし、駅前では傷痍軍人がアコーディオンを弾きながら、軍歌を歌って寄付を求める。僕もかわいそうに思い、何度か寄付しました。

〝ニコヨン〟という言葉はご存じですか？　日雇い労働者の日給が240円だったことを意味するのですが、動員所（職業安定所）にみんなが並び、保険も何もないまま、めちゃくちゃな働き方をさせられていたんですよ。また、トラックが残土をまき散らしながら走るため、これでいいのかと思うほど街も汚かった。それが当時の東京です。

小柴さんからのメッセージ

ぜひ、過去の真実を知ってほしい。報道の半分は疑い、正しい情報を得た上で、自分なりの感覚で戦争や平和を考えてくれれば嬉しいですね。

コラム 8 ● 傷痍軍人（しょういぐんじん）

戦闘で傷を負った軍人（兵士）のことで、厳密には、軍人恩給法による増加恩給・傷病年金・傷病賜金の受給権有資格者をさす。戦況が良好だった頃は“名誉の負傷”として英雄扱いされ、軍事保護院による職業訓練や医療支援、鉄道運賃免除、減税など、国家に手厚く保護されていた。しかし、戦後は各種恩恵が廃止され、障害や後遺症で定職に就くことも難しかったことから、復員した兵士の多くが貧困に苦しんだ。駅前や商店街では、通行人から小銭を請う傷痍軍人が数多く見られたという。昭和27（1952）年には戦傷病者戦没者遺族等援護法が制定され、軍関連や国家総動員法で動員された軍属・準軍属も含めて、翌年から国の保護が再開した。

街頭で寄付金を募る傷痍軍人（提供：しょうけい館）

INTERVIEW ● 佐々木光子さん

「死にたくない、生きたい」それだけを念じながら必死に空襲から逃げました。

インタビュアー

堀内史誉（ほりうち・ふみたか）
東海大学3年生
21歳

藁谷 結（わらがい・ゆい）
愛国高等学校3年生
18歳

千保木 蘭（ちほぎ・らん）
郁文館グローバル高等学校3年生
18歳

保科彰斗（ほしな・あきと）
郁文館グローバル高等学校3年生
18歳

商業女学校から日本銀行に就職された佐々木光子さんは、四の橋や魚籃坂のご自宅、通勤途中の市電（都電）などで、何度も空襲を体験されています。そうした空襲時の様子、戦時中の日常生活をお聞きするとともに、聞き手となる高校生・大学生にとっても身近な話題として、当時の就職事情なども語っていただきました。「私が皆さんと同い年の頃は、もう日銀で働いていたんですよ」という佐々木さんの言葉に、メンバーが驚きの表情を浮かべたところから、お話は始まりました。

戦争で未亡人となることに備え手に職を付けようと考えました

藁谷 ―― 真珠湾攻撃が始まった当時は、女学校に在学されていたのですよね。

佐々木 ― 昭和16（1941）年12月なので、卒業の前年でした。真珠湾攻撃の翌日には、全校生徒で明治神宮に参拝し、戦勝祈願をしましたよ。漠然とした不安こそあれ、まだ17歳の女学生ですからね、身に迫った戦争を意識することはあまりなかったかもしれません。

堀内 ―― 卒業後は日本銀行に進まれたそうですが、当時の就職状況はどうだったのでしょうか。

佐々木 ― 父が先進的な考え方の持ち主で、「この戦争は長期化し、結婚してもすぐ未亡人になりかねないから、手に職を付けたほうがいい」と、私を渋谷の商業女学校に進学させ

戦争体験者 佐々木光子（ささき・みつこ）さん （89歳）

大正15（1926）年、麻布一本松町（現・港区元麻布）生まれ。昭和17（1942）年に商業女学校卒業後、日本銀行考査局庶務課に勤務。昭和19（1944）年、強制疎開のため三田松坂町（現・三田）へ転居。空襲の激化にともない、日本銀行を退職する。戦後はフリーランスの速記者として活躍。東京速記士会会長。現在も港区に居住。

※マンガは、現代の若者が戦争・戦災を追体験するというコンセプトで描かれています。

たんですね。そこで特待生だったため、推薦で日本銀行に就職することができました。本当に運が良かったと思います。銀行という平和産業に就職できたことを、両親も喜んでくれました。お給料は安かったですけれど（笑）。軍関係に就職した同級生たちは、初任給も私の1・5～2倍、（当時のお金で）27円ほどだったそうですから。当時は軍関係が優先的に若い人を採っていくため、海軍省や陸軍省、航空本部などに進んだ女の子も多かったんです。

あ、そうそう、日銀には干しバナナの配給があったんですよ。軍関係では当たり前だったようですが、普通は手に入らないものなので。私も、こんなにおいしいものが世の中にあるのかと喜んだものです。それぐらい、食べる物が貴重な時代だったんですね。

堀内 ―― 日銀では、どのような仕事をされていたのですか？

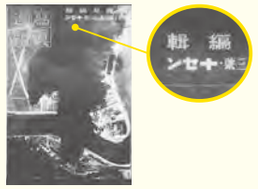
佐々木 ― 戦時下の金融統制を担う、考査局という部署に配属されました。当時の局長さんが戦後、日銀の総裁になられるほど重要な部署でしたから、17歳の小娘にとっては大変でしたよ。とにかく一生懸命なだけの毎日でしたが、おかげで日本のさまざまな事情も知ることができました。地方銀行の統一や金融政策など、戦争に勝つためにはいろいろなことをしなければならないんだなと、17歳なりに考える機会も多かったです。

空襲は本当に怖かった……自分の身は自分で守るしかない

千保木 ― 通勤途中でも空襲に遭われたそうですが、やはり怖かったですか？

コラム 9 ● 当時の物価・給料

前年末に真珠湾攻撃が起こり、日本が太平洋戦争に突入した昭和17年当時、大卒銀行員の初任給は70～75円、小学校教員の初任給は50～60円だったが、一般に、女性の給料はこれより低かったとされている。新聞購読は月額1円20銭、映画の封切館（ロードショー公開）は80銭、タクシーは2kmまで80銭。山手線の初乗り料金は10銭で、新橋－大阪間の運賃は5円95銭。庶民の日常生活における物価は、ビール1本が57銭、白米10kgが3円32銭、そば1杯が16銭、アンパン1個が5銭、鉛筆1本が15～20銭、レコードのSP盤（シングル盤）が3円23銭など。家族が暮らせる長屋（借家）の家賃は、月15～50円程度だった。



「十セン」と記載された昭和17年発行の雑誌の表紙（出典：『写真週報』203号、提供：アジア歴史資料センター、国立公文書館蔵）

佐々木 ― それはもう怖かったですよ。B29はすごく高いところを飛んでいるはずなのに、爆音がブォーンと間近に聞こえますから。あの音を耳にするだけで、身がすくむ思いでした。魚籃坂から日本橋の日銀へ市電（都電／路面電車）で通勤していたのですが、電車が古川橋から金杉橋のあたりまで来たときに、空襲警報が鳴りましてね。乗客の誰かが「こっちだ、こっちだ」と誘導してくださり、川の橋の下に逃げられたおかげで助かりました。

千保木 ― **防空壕のようなものが川にあったのですか？**

佐々木 ― いえいえ、ただ橋の下に逃げ込むだけです。まだ18歳の頃ですから、本当に怖かったですよ。

千保木 ― **お家は大丈夫だったのですか？**

佐々木 ― おかげさまで、無事でした。私の家はもともと四の橋近くだったのですが、当時は〝建物疎開〟という施策がありましてね。中の橋から麻布十番あたり、特に四の橋の川沿い近辺は、空襲で火災が起きると逃げ場がないため、強制的に他の場所へ移住させられたんです。私の家も、魚籃坂に引っ越しました。四の橋周辺は後の空襲で焼け野原になりましたし、魚籃坂も私の家があった一角を残して焼けましたから、運が良かったんですね。当時の港区は小さな町工場や木造家屋が大半で、大工さんや左官屋さんなどの職人さんがたくさん住んでいる街でしたけれど、空襲で何もかもなくなってしまいました。

堀内 ― **高層ビルが立ち並ぶ今の港区とは、まったく違う様子だったのですね。**

練馬区にあった日銀のテニスコートで撮影された写真。後列左から5番目が佐々木さん

昭和17（1942）年時の佐々木さん。日銀のオフィスにて

コラム 10 ● 強制疎開（きょうせいそかい）

建物疎開・家屋疎開とも呼ばれ、空襲による火災被害・延焼を抑えるため、特定地域の住民を強制的に他の土地へ移転させた戦時施策。全国で60万戸以上が対象になったとされる。残された建物は軍が取り壊し、国民学校の生徒や女性による勤労奉仕隊などが整地にあたった。跡地は防火帯となったが、実際には避難場所や資材置き場として利用されることが多かったという。戦後は多くが道路に転用され、横浜市の根岸疎開道路、広島市の平和大通りなどが代表的。平和大通りとなった場所では、強制疎開に従事していた数千人の学童が原爆被害に遭った。

家財道具をまとめ、疎開先に向かう様子（出典：『写真週報』311号、提供：アジア歴史資料センター、国立公文書館蔵）

佐々木 ― 皆さんは、魚籃坂のピーコックストア（スーパーマーケット）をご存じ？　あの裏手一帯は、戦後の払い下げで一般の方が暮らし始めるまで、高松宮様の御料地だったんですよ。空襲の際は門を開けてくださるので、皆がそこに逃げ込んでいました。大きな木がたくさん茂り、上空から下が見えなかったためか、あそこだけは空襲されなかったんです。やがて近所の児童公園に防空壕ができ、昭和20（1945）年3月10日の東京大空襲ではそこに逃げ込みました。

千保木 ― **現在は災害時の避難場所に学校などが指定されていますが、そうした場所はなかったのですか？**

佐々木 ― なかったですね。何事も軍事優先で、庶民の暮らしは自分で守るしかないという風潮が一般的でした。四の橋の家では畳を剥がし、床下に穴を掘って防空壕の代わりにしていましたよ。庭がない家では、そうするしかなかったんです。庭に防空壕を作った家にしても、ただ土を盛り、穴にトタンを被せるぐらいの簡素な作りでした。今思えば、機銃掃射だけでも弾が飛び込んで来ちゃいますよね。私自身も、そこが安全だとはとても思えなくて。防空壕が火に包まれ、中の人たちがみんな焼け死んだという記事を新聞でたくさん読んでいましたから……。

堀内 ― **沖縄などに残る、大きな防空壕のイメージしかなかったので驚きました。他に安全な場所もなければ、避難ルートも決まってはいなかったわけですね。**

佐々木 ― そうなんです。とにかく（空が）赤くない方角へ逃げるしかな

いんです。焼夷弾が落ちると、空が真っ赤になるんですよ。焼夷弾は、わかりますよね？「シュルシュル!!」という落下音だけでも怖いのに、中身が火を噴きながら散らばるので、あちこちがすぐ火事になってしまう。だからみんな、火事を一番に恐れていました。

保科 ―― 空襲があることは、空襲警報が鳴るまでわからないのですか？

佐々木 ― 空襲警報と同時に、ラジオで「東京上空に敵機が何機来襲」などと放送されました。でも、雑音だらけでよく聞き取れないんですよ。なので父が外に出て、見上げた空のどちら方面が赤いかで判断していました。子ども心に、「（火が）こっちに来ませんように」と願ったのをよく覚えています。

麻布十番の一帯が火に包まれたときは、家から逃げました。母は不在だったので、父と2人、大八車に布団や食べ物を積んで。「死にたくない、生きたい」と、18歳の女の子なりにそれだけを念じながら、父が引く大八車を必死に押しましたよ。他のことを考える余裕など、ありませんでしたから。古川橋から川筋に沿い、誰もが必死で逃げていましたね。

サツマイモの根で作ったお粥
都会の食生活は厳しいものでした

藁谷 ―― 日銀を辞められたのも、空襲がきっかけだったそうですね。

佐々木 ― 東京大空襲で東京がひどいありさまになったため、父の判断です。通勤中の空襲が怖かったですし、家にいれば、空襲で家族が離ればなれになることもないでしょうから。それからは、家で速記の仕事をしていました。戦時下では、速記者が希少職業として重用されていたんですよ。

堀内 ―― 速記とはどのような仕事ですか？

佐々木 ― 航空工業会という陸軍の外郭団体から、お仕事を請け負っていました。女性の方3人と一緒でしたが、私が一番若い19歳でした。軍関係の機密事項も一生懸命に速記したはずなのに、何も覚えてないんですよ（笑）。

今の若い方は速記と言われても馴染みが薄いかもしれませんが、当時の欧米では、女性がハイスクールで速記を習うことは当たり前だったらしいですね。日本でも、女性の職業といえば女医さんか看護婦、小学校教師、速記者が代表的なものでした。渋谷の商業女学校を選んだのも、東京に2校しかない、速記が正式科目の学校だったからです。日銀に就職してからも、通勤電車の中で速記符号の勉強を続けていました。

藁谷 ―― 戦時中の食生活についてもお聞きしたいのですが。

佐々木 ― 配給のお米は1日1合ぐらいですから、親子3人ではとても足りません。配給されたサツマイモの根っこをお粥にして食べるほど、本当に食べ物がなかったんです。麻布に多かった広い邸宅では、庭でジャガイモなどを育てていたそうですよ。

配給だけでは食べていけないので、両親が農家へ買い出しに行き、着物とお米を交換してもらっていました。主食は買い出し、副食は闇市でという暮らしですね。

就職後の休日には、私も練馬のほうへ物々交換に行きました。しかし、「着物なんかたくさんあるから、他の物を持ってこい」と怒られ、泣く泣く帰ってきたことも……。皆さんが着物を持っていくので、農家では着物が余っていたのでしょうね。そう言われても、洋服は自分たちが着る分しかありませんでした。

保科 ―― どれぐらいの食べ物と交換してもらえたのですか？

佐々木 ― 着物1着で、せいぜいお米1升ほどですね。昭和18（1943）年頃まではまだ良かったのですが、翌年になると、闇物資の一斉取り締まりが始まりました。郊外電車に大勢の警察官が乗り込んできて、せっかく交換したお米や食

コラム 11 ● 防空壕（ぼうくうごう）

空襲が激化した太平洋戦争末期、内務省は「防空壕構築指導要領」を定め、20人程度収容の小規模な防空壕を分散配置するよう推奨していた。地形によって竪穴式・横穴式が作られ、内部は腰掛けられるくらいの、高さ（深さ）1.5m程度。丸太や角材で補強し、周囲には掘り出した土を30～60cmほど積み上げた。一般家庭では軒下に穴を掘り、トタン板を被せただけの簡易的な防空壕も多かった。爆風被害こそ抑えられたものの、焼夷弾には効果がなく、地下壕で蒸し焼きとなって死亡する人々が続出。戦争末期の空襲時は、防空壕に入らず逃げる人も多かった。

東京の街路で防空壕を作っている学生たち（提供：昭和館）

べ物を没収してしまうんですよ。「子どもがいるので勘弁してください」と、泣きながら頼むお母さんも目にしました。都会で暮らす人たちの食生活は、本当に大変でした。

終戦こそ〝希望〟でしたが、戦後の港区は米軍のジープだらけ……

保科――**玉音放送はご自宅で聞かれたのですよね？**

佐々木―みんな号泣したなどといわれますが、私の場合はラジオが雑音でよく聞こえなかったこともあり、「なんか戦争が終わったみたい。良かった、これで買い出しに行かなくて済む」と思ったものです。

千保木―**安心したという感じですか？**

佐々木―そうそう、安心したのね。命が助かった、もう防空壕に入らなくていいんだと。これから先の人生を思うと、嬉しい気持ちのほうが強かったですね。戦争が終わって、「生きられる」。この希望が何より一番でした。

千保木―**戦争が終わり、一番変わったことは何ですか？**

佐々木―お金さえあれば、お腹いっぱい食べられるようになったことかしら（笑）。新円切換制度で盛り上がる闇市に行けば、戦時中はなかった甘いものも買えましたから。

堀内――**戦後の東京は、やはりアメリカ軍の占領地といった雰囲気だったのでしょうか。**

佐々木―日比谷にGHQ本部がありましたから、港区内も進駐軍のジープだらけでした。街中を走り回るジープに、「日本は本当に負けたんだな」と実感したものです。

父が新橋の闇市まで買い出しに行く途中、ジープにひかれてしまったことがありました。赤羽橋の済生会病院に入院したのですが、病院はどこもGHQに接収されているため、日本人の患者を診てくれるお医者さんなど少なくて……。病院食もないので、みんなが七輪を持ち込み、自分たちで患者さんにご飯を食べさせてあげました。

日本の警察はGHQに従うだけですから、2、3年後、GHQに弁護士さんの助けで補償を求めました。でも、「占領地での活動を日本人が妨害した」との理由から却下され、一銭も支払われず。平和条約が結ばれるまでは、何が起きても「占領政策の妨害」で済まされてしまったんですね。当時は保険などもなく、母は病院で父に付き添い、私が速記のお仕事で家計を支えました。

保科――**戦後も速記のお仕事を続けられたのですよね。**

佐々木―戦争中、弾圧されていた言論活動が一気に噴き出し、誰もが情報に飢えていた時期ですからね。雑誌の座談会などで、速記のお仕事をたくさん頼まれました。戦争が終わり、速記のお仕事を思いきりできるようになったことが、一番嬉しかったかもしれません。

佐々木さんからのメッセージ

戦争に関しては、国民に情報が正しく伝わらないケースも少なくありません。国民は常に蚊帳の外です。ですから、入手した情報を自分で考えることが一番大切でしょうね。戦争がいかに悲惨で、二度と起こしてはいけないことであるか。空襲もよそ事ではなく、この大都会の東京のど真ん中で起きたのですから。戦争は人と人との殺し合いで、恐ろしいものだということを伝えていってほしいですね。

INTERVIEW ● 岩垂広子さん

「最後はみんなで一緒に死にましょう」産院は火の海、赤ん坊を守りながらも逃げる場所などないと思った。

中村充孝（なかむら・みつたか）
明治学院大学4年生
22歳

秋山裕香（あきやま・ゆうか）
普連土学園高等学校1年生
16歳

任 俊赫（いん・しゅんかく）
慶應義塾大学2年生
21歳

インタビュアー

太平洋戦争開戦後に結婚。夫が徴兵された後に妊娠が分かり、疎開先で出産。乳飲み子を抱え、安全な場所を求めて転々とした岩垂広子さん。たび重なる空襲をくぐり抜けながらも母となった女性の視点から、当時の町の様子や暮らしぶりについて語ってくださいました。終始和やかに進むインタビューのなかで、3人の高校生・大学生が、戦時中の女性の生き様に迫ります。

太平洋戦争のさなかに結婚し、夫が召集された直後に妊娠を知る

秋山――**ご結婚されたのはいつですか？**

岩垂――昭和18（1943）年10月22日です。太平洋戦争開戦から約2年が経った頃でした。

秋山――**戦争中に結婚するというのが、今の私たちからすると想像しにくいのですが。**

岩垂――当時は普通の感覚でした。私は19歳でしたが、女学校の同級生の多くはそのくらいの年齢で結婚していましたよ。

結婚式は帝国ホテルで行いました。割合に多くの人が出席してくださいましたよ。といっても戦争中ですから、食事をするにはお米持参で行く必要がありました。

秋山――**どのような経緯で結婚が決まったのですか？**

岩垂――父親同士が話し合って決めたことです。主人の父は医薬品関係の会社をやって

戦争体験者 岩垂広子（いわだれ・ひろこ）さん （92歳）

大正12（1923）年、静岡県浜松市生まれ。6歳の時に東京へ。太平洋戦争のさなか、医薬品メーカー・万有製薬株式会社（現在のMSD株式会社）経営者の御曹司と結婚。夫が召集中に妊娠を知り、昭和20（1945）年3月に出産。乳児とともに疎開する。現在は港区に居住。

※マンガは、現代の若者が戦争・戦災を追体験するというコンセプトで描かれています。

コラム 12 ● 徴兵猶予と学徒出陣

長きにわたる戦争で日本は下級将校やパイロットなど一定の判断能力を有する人材の不足に陥ったため、昭和18(1943)年10月1日、「在学徴集延期臨時特例」を公布。いわゆる学徒出陣で、それまで一定年齢までの学生に適用されていた徴兵猶予が停止となり、在学中でも20歳以上であれば徴兵することが可能になった。ただしこれは文科系や農学部の一部の学科に属する学生に向けたもので、兵器開発に欠かせない理工系の学生や、医薬系、教員となる学生は例外とされた。しかし戦局が悪化するにつれ、徴兵年齢はさらに引き下げられた。

「学徒出陣」という言葉が最初に使われた本。高瀬五郎監修 高戸顕隆述『学徒出陣』(提供：慶應義塾福澤研究センター)

おりまして、私の父は医師でした。つきあってみて、お互いに不足がなければ結婚を、ということでした。主人は当時薬学を学ぶ大学生でしたね。

秋山 ―― 岩垂さんは学生時代どんなことを勉強されていたのですか？

岩垂 ―― 私は高等女学校を出て結婚していますので、とくに学歴があるわけではないんですよ。今でいう高校ですが、授業の時間はほとんどなくて、傷痍軍人が着る服を縫ったりしていましたね。学校で作業をするだけで、工場へ出たりするということはありませんでした。それでも、学生生活は楽しかったんですよ。まあ若かったからね。

秋山 ―― 少し時代がさかのぼりますが、東京にいらしたということは、二・二六事件などもご存じなんですよね。

岩垂 ―― ええ。結婚までは旗の台の実家に住んでおりましたので、二・二六事件のことは覚えていますよ。昭和11（1936）年のことですね。軍がいばっていて、勝手に事件を起こして……天皇陛下のご命令に背きましたから、捕まって当然だと私は思いました。とはいえ記憶に残っているのは、怖かったなどという理由からではなく、学校が休みになったからです。あの冬は大雪が降って、近所の友達と雪合戦をしたんですよ。楽しかったです。

秋山 ―― 太平洋戦争が始まったときのお気持ちを聞かせてください。

岩垂 ―― とうとう戦争が始まったんだなと思っただけです。当時の日本は軍事一色でしたから。

秋山 ―― ご主人にも召集令状が？

岩垂 ―― 主人は後に出征しましたけれど、医薬系の学生は学徒出陣の例外だっ

たので、卒業してから行ったんですよ。ちょっと仕事に就いてからね。主人に召集令状が届いたのは、私と結婚した後のことでした。

秋山――**そのときのお気持ちは？**

岩垂――ついに来たか、と思いました。

任――**おなかに赤ちゃんがいるとわかったとき、ご主人はそばにいらっしゃらなかったそうですが、不安ではありませんでしたか？**

岩垂――妊娠を知ったのは、昭和19（1944）年の秋。主人が甲府の連隊に入った後のことですが、不安は特にありませんでしたよ。おなかに子どもがいるとわかって、嬉しかったです。

すでに戦地に行くための船が一隻もなかったようで、主人は内地勤務だったんです。それに、手紙のやり取りはできましたから。

任――**手紙ではどんなやり取りをされていたのですか？**

岩垂――主人はあれがほしい、これがほしい、と書いてきましたね。私はそれを調達して送るわけなんです。唇が荒れるんでしょうか、気に入っている塗り薬がありましてね。それを送ってほしいとたびたび言ってくるんですが、軍隊の郵便物に検閲が入ることもあってか、途中でみんな取られちゃうんです。私が送ったものはほとんど主人のところへ届いていなかったと思いますよ。上官が取ってしまうこともあったようですし。

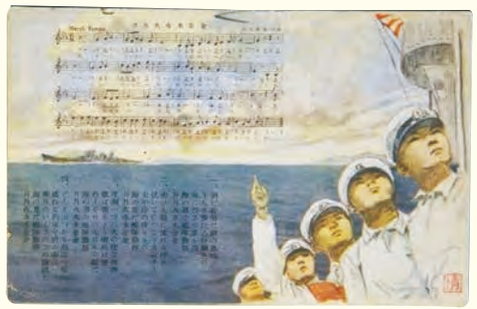
任――**おなかの子どもの様子も伝えましたか？**

岩垂――もちろんです。喜んでくれました。

秋山――**千人針なども縫ったりしたのでしょうか。**

コラム 13 ● 戦時中のスローガン

「産めよ殖やせよ」（正確には「産めよ殖やせよ国のため」）は昭和4（1929）年に厚生省が結婚十訓の一つとしてあげたものだが、戦時中は国や地方公共団体、新聞社ほか民間の団体が、多くのスローガンを掲げて国民の戦意高揚を図ってきた。明治時代に大日本帝国海軍から広まり軍歌にまでなった「月月火水木金金」、『古事記』から抜粋したポスターで話題となった「撃ちてし止まむ」、新聞社と大政翼賛会が国民決意の標語として募集した「欲しがりません勝つまでは」など、戦後70年が過ぎた今も記憶に残るスローガンも。



軍歌になった「月月火水木金金」のレコード宣伝用のハガキ（提供：アド・ミュージアム東京）

岩垂――ええ、やりましたよ。もっとも、うちは母が寅年でしたのでね。通常は千人の女性が一人一針ずつ縫い結び目をつくっていくものなんですが、寅年の女性だけは例外で、自分の年齢分だけ結び目を作ることができるんです。母は「出征する婿のために」と、街頭に立ったり、自分のまわりの寅年のお友達にたのんでくれました。

空襲で浦和の町が燃えさかるなか生まれたばかりの赤ちゃんを守った

中村――**疎開先を転々とされたそうですが、いつ頃どこへいらしたのですか？**

岩垂――当初は疎開という感覚ではなく、出産できる病院を求めて移転していました。

まず東京都内で移転しました。結婚後は元麻布におりましたが、近くに防空壕がなかったので、昭和19年12月に白金台町にある主人の実家へ移ります。しかししばらくして、主人の両親が当時万有製薬の子会社があった中国へ視察に行き、その後同居していた兄嫁が子どもを連れて疎開してしまったために、私と義兄二人きりになってしまって。それは少しまずいかな、ということで、旗の台の実家へ戻ることになりました。そこで妊娠が分かったのですが、今度は、実家が焼けてしまうんですよ。通っていた田園調布の産婦人科が、近くに空襲があったこともあり、危険を感じて診療をやめてしまわれたものですから、しかたなく父の病院があった埼玉の浦和市（現・さいたま市）へ移転したんです。

中村――**浦和には長くいらっしゃったのですか？**

岩垂――3、4カ月ですかね。そのうち浦和市内も空襲されるようになってきたので、市街地から少し離れた六辻町というところに移りました。

中村――**移動も大変だったのではないですか？**

岩垂――ええ。汽車の切符はなかなか取れませんし、自動車なんてものは身近にありませんでしたから、長距離でなければ、自転車の後ろに乗せてもらって行きましたね。

中村――**浦和に空襲があったのはいつですか？**

岩垂――お産が近くなってからは、六辻から、父がやっていた浦和の病院の敷地内の家へ移って、近くの産院で無事女の子を出産しました。昭和20（1945）年3月23日のことです。空襲に遭ったのは、その後すぐのことですね。産院のまわりは火の海になりました。他はすべて焼け落ちてしまって。先生は戦争に行ってすでにおりませんでしたので、助産師さんが1人、あとを引き継いで運営していたんですよ。入院患者は10人くらいおりましたね。

助産師さんはそのとき、「これだけの人数がいたら、私はみなさんを連れて逃げることもできないし、こんな火の海ではみなさんも逃げられないでしょうから、最後はみんなで一緒に死にましょう」そう言って、患者を一室に集めたんです。赤ちゃんも一緒に。

中村――**周りが燃える中、赤ちゃんを守っていたということですよね。**

岩垂――火の海ですから、逃げる場所などありません。ここで死ぬより仕方ない、そう思いました。

私たちはなんとか生き残りましたが、その産院一軒を残して、辺りは焼け野原になりました。ところどころ残ってはいましたけど、浦和市内はその空襲でほぼ全滅しましたね。

任――**火がおさまって、その後退院されたと。**

岩垂――市街地から少し外れていたおかげで父の経営していた浦和の病院も残りまして、そこでしばらく過ごした後、白金台町にある主人の実家へ一時的に戻りました。汽車の切符が手に入るまでの間にお宮参りを済ませ、写真をちょっと撮りまして、今度は河口湖へ向かいました。

中村――**切符が手に入っていたら、すぐにでも疎開していましたか？**

岩垂――もちろんです、赤ちゃんを連れていましたから。その頃、兄嫁たちが住んでいた箱根の家が焼けてしまいまして、母子で河口湖へ移っていたんですよ。私は義兄の家族たちと合流したわけです。最終的に河口湖には、小姑と義兄家族と私がそろいました。季節は夏でした。

中村――**赤ちゃんを連れていて大変だということは？**

岩垂――河口湖への移動は大変でしたね。途中でお乳をあげなきゃいけませんし、オムツも替えなければなりません。汽車はそれはそれは混雑していました。

秋山――**疎開先の河口湖は、食料は多かったですか？**

岩垂――配給ですから、量はどこも変わらないですよ。

秋山――**農地で野菜を作りましたか？**

岩垂――ほとんど配給でやりくりしていましたね。河口湖の家の持ち主のおばさんが、畑で取れたじゃがいもをくれることもありましたけど。配給は赤ちゃんの分ももらえるんです。そういう意味では、「産めよ殖やせよ」という国策に沿った生き方だったんでしょうね。それでも十分とは言えない量でしたが。

お米の配給は1日7勺（0・7合）ずつくらいですね。薄いおじやを作って食べていました。他にどんなものを食べていたかはよく覚えていませんが、おなかをすかせていたことは事実です。でも幸いなことに、お乳はよく出たんですよ。

中村――**心細いことはありませんでしたか？**

コラム 14 ● 配給制 …… 配給制度

日中戦争～太平洋戦争の泥沼化に伴い、慢性的に不足する日常生活物資を統制配給した制度。昭和13（1938）年の綿糸配給統制規則（綿製品の規制）を皮切りに、電力、砂糖、マッチ、米穀、衣料などが次々と配給制に移行し、最終的には日用品から生産資材まで大半の物資が対象となった。各世帯には家族数に応じた配給切符が交付され、物資と引き替える仕組みだったが、戦争末期には配給物資すら不足。闇取引や闇市が、庶民の生活を支えていた。戦後の復興とともに順次撤廃されたが、米穀だけは1970年代まで配給制が続いた。

衣料品を購入する際に必要とされた衣料切符
（提供：平和祈念展示資料館）

岩垂――心細いなんて……食べることだけで精一杯でしたから。赤ん坊の世話もありましたしね。

秋山――**戦況が厳しくなってきた頃だとは思いますが、ご主人には出産のご報告をされていたのですか？**

岩垂――手紙を送りました、「女の子が生まれました」と。主人は男の子を望んでいたので「女の子で残念だ」という返事がきましたが、子どもが生まれたことはとても喜んでいましたよ。

中村――**玉音放送を聞いたのは河口湖だったのですよね。**

岩垂――そうです。でも天皇陛下のお言葉がさっぱりわからなくてね。2、3日して、負けたんだと知りました。

中村――**敗戦を知って、どう思われましたか？**

岩垂――これで主人が帰ってくる！　そう思いましたね。負けたことを認めたくない人も周囲にはいたようですが。

中村――**ご主人の反応はどうでした？**

岩垂――負けると思っていたと笑っていました。だって自分が乗る船がなくなっちゃって、どこへも行けないんですから（笑）。

終戦、夫との再会 そして愛娘との別れ

秋山――**おなかいっぱい食べられるようになったのはいつごろでしたか？**

岩垂――戦争が終わって、何年かしてからでしょうね。最初の選挙ではどの政党も「1日3合配給」と公約を掲げるような状況でした。

任――**ご主人は無事に戻られたのですよね。**

岩垂――主人は無事でしたが、すぐには戻らなかったんです。英語が多少できましたから、進駐軍の通訳として残されたんですね。帰ってきたのは9月になってから。私は疎開先で体を壊しまして、旗の台の実家は焼けてしまいましたので浦和に戻っていました。

その頃の話ですが、私の父が「娘の嫁ぎ先はどうなっているのか」と白金台町の主人の実家を見に行ったことがありました。父はそこで、私の主人とバッタリ会ったそうです。主人は主人で米兵から3時間だけ外出許可をもらい、自分の出た大学と育った家を見に行っていたと。父も主人も、お互いの無事を確認できてよかったと言っていましたね。すごい偶然があるものです。

任――**ご主人が通訳のお仕事を終えた後は？**

岩垂――主人の父の会社もほとんどが焼けてしまって、愛知県の岡崎にある工場だけが残りましたので、そちらへ転居しました。昭和20（1945）年暮れのことです。ヘキソという名前の新しい薬を作っておりました。広島の原爆患者に効くと言われて飛ぶように売れていましたので、とても忙しかったと記憶しています。

任――**その後お子さんは？**

岩垂――同じ年の暮れにジフテリアで亡くなりました。いろんなことが原因だったんでしょうけど、当時の医学ではどうしようもありませんでした。

岩垂さんからのメッセージ

戦争なんて、あんなバカなものはありません。勝った方だって負けた方だって、お互いに傷つくんですから。これから先も、日本人は核兵器を作らないほうがいいですね。自分たちが核兵器でひどい目に遭っていますから。それだけは大きな声で言いたいと思います。

麻布谷町にて

安藤重男さん（87歳）

昭和3年生まれの私は、麻布区谷町（現・六本木一丁目、アークヒルズ付近）にて、夏は「かき氷」冬は「焼き芋」を戦前まで営み、東京オリンピックの開催に合わせ、高速道路の建設により立ち退くまで住居を構えておりました。子どものころは、夏になるとよく首相官邸下の原っぱへバッタ取りに行ったものでした。麻布尋常小学校2年生だった時に、その首相官邸を中心に起こった二・二六事件の日は、授業が打ち切られ、全員早退となり、通りに駐営していたタンク（戦車）を見に行っている間に、いつの間にやら家の前に銃剣の先をこちらに向けた歩兵が立っており、思わずその恐怖から「僕の家、ここ、ここ」と指さしながら、一目散に家へ駆け込んだ思い出があります。3日後の29日に「兵に告ぐ」のビラが飛行機からばらまかれ、歩兵第一連隊と第三連隊の駐屯地の間（現ミッドタウンあたり）にはアドバルーンが掲げられました。歩兵連隊に帰順した白タスキを肩に掛けた兵隊たちの行列を見ていると、近所のおばさんが知り合いの兵士がいたらしく、「ああ○○ちゃんがいる」と悲しみと驚きの入り交じった声を上げていました。後に聞いたところによると、兵士たちはすべて満州に送られたそうです。

谷町は霊南坂やアメリカ大使館とほど近く、房総半島から飛来してくるB29の進入口に当たり、夜間に昼間のように明るい照明弾を落としていったこともありました。戦時中の焼けた谷町界隈の写真を見ると、アメリカ大使館だけ残っているのが見て取れます。きっと大使館の場所を確認したのでしょう。ある日の昼間空高くやってきたB29に日本の戦闘機が体当たりし、そのまま墜落していくのを目にしました。もちろんB29は悠然と去っていったのは言うまでもありません。昭和20年3月10日の東京大空襲の時は被災を免れたわが家も、5月25日の山の手空襲の時、焼夷弾こそ落ちてはきませんでしたが、溜池方面から火が燃え広がり、とうとう焼け落ちてしまいました。その際持ち出した大きな真空管ラジオは、戦後に米2升と交換できました。その買い出しは、栃木の野州大塚へ何回も出かけたものでした。ある時交換を終え、家に戻る途中、栗橋駅で一斉取り締まりがあり、泣く泣く米を列車の窓から捨てたものでした（芋だけは取られませんでした）。そのうち買い出しは何を持って行っても交換してくれなくなり困り果てました。あのころの日々の生活は、今思い出しても大変な苦労であり、厳しいものでした。戦後70年、戦争のない平和を身をもって噛みしめている今日このごろです。二度とあのような戦争は起こしてはなりません。

僕の小学校5年生

岡田 榮さん（79歳）

僕たちの学校は、上野駅から東北本線にて約70キロメートル、久喜駅と栗橋駅の中間に位置する所で、現在は久喜市立桜田小学校となっております。当時の僕たちの学校には、兵隊さんが駐屯（滞在）しており、学校の校庭には、直径20メートル位のスリバチ状の穴を掘り、また、障壁を作り訓練をしておりました。僕たちは、兵隊さんの食料確保の手助けのため、道路の端50センチメートル位を耕し、作物を栽培し兵隊さんの食料の足しにしておりました。

学校の通学時には、俵（お米を保管する袋）を作るための両端をふさぐワラで編んだ蓋を縄で肩掛けにして持って行き、空襲警報のサイレンが鳴ると学校の近くの竹やぶに避難し、そこで勉強するための敷物として使用したり、縄を編んだり、カイコを育てる桑の木の皮をむくために座る敷物として利用しておりました。桑の皮は兵隊さんの服を作るために役に立っておりました。

アメリカの飛行機は千葉県沖から飛来し、群馬県にある軍需工場を爆撃すると聞いておりました。僕たちの住んでいる所は、その空路の下にあたるため、いつもおびやかされておりました。夜になると現在みたいに高い建物がないため、東京では空襲で毎日のように真っ赤に燃えている光景を目にしておりました。昭和20年8月15日には、父親からラジオの前に正座させられ、終戦に関わる玉音放送を聞かされました。覚えておることは、その一節に「ただいまより重大な放送があります」とあり、その他は理解できませんでした。ただ放送が終わった時点で、父親から「もう空襲はないよ」と言われたことだけは記憶しております。

空襲に備えた防空訓練の様子（出典：『写真週報』301号、提供：アジア歴史資料センター、国立公文書館蔵）

戦時下の小中学生と港区内での空襲体験

小嶋康男さん（82歳）

東京の山手大空襲の記憶は今でも鮮明に記憶しています。戦時中の子どもの生活とともに、書き記したいと存じます。日米開戦の12月8日は、小学3年生でしたが、朝のラジオニュースで知り、アメリカと戦争して大丈夫なのかと、非常に不安になったことを記憶しています。戦局が不利になると、毎月一度は町内ごとに防空演習が行われ、各家がすべて参加を義務づけられていました。バケツリレーで焼夷弾を消す訓練でしたが、小学生の私でも、「敵機が各町内に一発一発ずつ落とすはずはない、一町内に何十発も落下してきたらとても消火できないんじゃないか」と内心思っていました。また小学5年生のころ、学校の全生徒を集めて陸軍少佐が講演に来て、「陸軍がモンゴルの砂漠で爆撃演習を行ったが5メートルの円の中に4千メートル上空から30発投下したが一発も命中しなかった。

だから爆弾は当たるものではない。恐れることはない」との話をしました。砂漠ならいいが、東京などの大都市ならどこに落ちてもそこに家があり、人が住んでいるのにと、子ども心にも内心強く反発しました。

父は東京帝大工学部卒の技術屋でしたので、戦争後半になって日本が敗色濃厚になっても大本営発表は勝った勝ったという放送ばかりでしたが、父は晩御飯の時などに「うそっぱちだ」と言っていました。多分戦況を冷静に分析しての発言だったと思います。父は東條を「あんな奴は駄目だ」と口ぐせのように言っており、停戦派の米内海相に期待していたようでした。

さて戦時中、多くの小中学生が夢中になっていた趣味は飛行機で、現代の鉄道マニアより熱中していました。飛行機の雑誌を皆で回し読み、模型を作り、米英独の軍用機の性能武装はすべて暗記していました。日本機は性能その他すべて秘密なのであまり人気はなく、米英独の新鋭機が人気の中心でした。「超空の要塞」B29も、すでに試作機のころから子どもたちの注目の的で、その性能も熟知していました。たとえば、エンジンは4基ライトサイクロン空冷星型2千200馬力過給機付き。過給機とは、現代では自動車で使用されているターボのことです。本来1万メートルの空気の薄い高空を飛ぶために米国で開発された精巧機器です。日本では研究中で実用化できず、高空を飛ぶB29を日本戦闘機が迎撃できなかった理由です。当時の小中学生はそんなことまで知っていました。

山手大空襲時は、赤坂台町に祖父、両親、2人の姉と共に住んでいました。4月に中学に進学したばかりでした。その日は3月10日のような強風も吹かず静かな一日でしたが、夜の12時ころいつもの不気味なサイレンが鳴り響き、眠い目をこすりつつ起きて身支度をし、外に出て空を見張っていました。やがて西の空からB29が、特攻機の体当たり爆発を恐れて、編隊を組まずに一機ずつ間隔を置いて進入して来ます。早くも渋谷方向の空は真っ赤になり、その光を反射してオレンジ色に染まったB29が1メートル位の大きさで上空を飛行して、焼夷弾を落として行きます。今夜はいつもより我が家の近くを飛んでいます。高度は2千メートルくらいでしょうか、親子爆弾なので、途中で花火のように開いて真っ赤な火の玉が数十発、音もなくゆっくりと地上へ落ちて行きます。赤坂見附の方角から高射機関銃の火線が一本上りましたが、半分位の高さで腰折れして役立たず。

そのうち家の真上をB29が飛ぶようになり、約100メートルはなれた高台にある某鉄道会社の社長邸の辺り一面が真っ青な光で真昼のようになりました。青い光を出すのはエレクトロン焼夷弾と教わっていましたので、すぐ分かりました。大量に投下する油脂焼夷弾の爆撃地域を決める目印だったようです。私たち家族5人は避難することに決め、高橋是清邸の横道から青山通り※1へ出ました。父は当直で留守でした。かねてから予定していた青山墓地へは行くことができず、青山一丁目方向はもう火の海で人々がどんどんこちらへ逃げてきます。それでも一度はそちらへ歩き出しましたが、逃げて来る人たちに口々に止められて「あっちは死人の山だぞ」とまで言われ、それではと赤坂見附の方向を見るといつの間にか火の海になっていました。その青山方向から裸馬が数頭一団となって赤坂見附方向へ狂ったように走り去りました。青山一丁目の師団司令部から逃げ出した軍馬だと思いますが、この無人の馬を見た時、ああ僕たちも死ぬんだなと思いました。そのうち台風のような強風が吹き出し、火の粉が赤い吹雪のように真横から吹きつけてきました。その場にいた大勢の人たちは、火の粉をよけるため※2赤坂御用地の空堀（今は埋められています）へ身を潜め、服につく火の粉を払いながら、「これ以上火勢が強くなったら火の気の少ない御所の中へ土手を上って入りこもう」と皆でそう言っていました。事実、1人の勇気ある男性が土手を乗り越えて御所のやみの中へ入って行きました。そして間もなく信じられないことが起きました。固く閉じていた正門が開き警備の将校が出て来て「荷物を持ち込まなければ入ってよい。これは殿下の御命令である」と大声で呼びかけました。その場にいた数百人の人たちは私たち家族を含めて全員が命を助けてもらいました。門の入口には着剣した銃を構えた兵士が「荷物を持っている者は突くぞ」と叫んでいましたが、もちろん荷物を持ち込む者は一人もいません。命を助けてもらったことは今でも感謝しております。さて御所の杜で一夜を明かし、夜明けと共に我が家へ戻りましたが一望焼け野原で、我が家の50坪位の土地に直径10センチメートル位の焼夷弾の空筒が6本突きささっていました。その後、外側が焼け残った檜町小学校に収容され3日間を過ごしました。2日間は空腹を我慢するだけでしたが、3日目に塩味のおにぎり一個と薄めた牛乳をコップ一杯ずつ支給され、何とか空腹をしのぐことができました。一番つらかったのは、御所以外へ逃げた人たちも一緒にいて、荷物から非常食を出して食べている姿を見て見ぬふりをしているのはつらい体験でした。翌日父の知人の世話で京橋へ移り、昭和22年に青山へ戻り、現在まで居住しています。

※1　当時の青山通りは約22メートルの道路で、中央部には路面電車（都電）の軌道が通っていたため、〝電車通り〟と呼ぶ人もいました。その後、昭和39（1964）年の東京オリンピックに向けて大幅な工事が行われ、40メートルの道路へと拡張されました。
※2　当時青山通りに面して門がありました。現在の草月会館の前あたりにあったと記憶しています。空堀は、皇居のお堀のような大規模なものではなく、幅が2～2・5メートル、深さは1メートルくらいで水は入っていませんでした。

欲しがりません勝つまでは

鈴木和子さん（88歳）

ごちそうさまと口では言っても空腹感は満たされず、次の食事までまだ6時間も、とつらい思いは戦中・戦後何年も続きました。その話をすると、お菓子を食べればいいじゃないのという答えが返ってきます。菓子など夢のまた夢、何時間も並んで少量のビスケットを手に入れていたことは、もう思い出となっていました。

男女別、年齢別に決められた米穀通帳が配られていましたが、必要カロリーには足りず、遅配、欠配も続きました。米の中には油をしぼり取った大豆のかすが混ぜてあり、時には大豆だけのこともありました。小さく切った大根、アンモニア臭のプンプンする鯖が配給されたこともありました。それでも鼻をつまんで大切に食べたものです。タンポポやオオバコの葉をつんでおひたしにしたり、少しでも食料をと狭い空地に野菜の種をまいたりし

ました。大事に取っておいた油を使ってユキノシタの葉を天ぷらにした時は、こんなにおいしい物があったのかしらと感激したものです。

昭和19年、今の高校に当たる高等女学校の5年生だった私は、1年間に授業を受けたのは半月足らず、勤労報国隊と言って軍需工場に動員され、工員さんに指示された仕事をしていました。部品を数えたり、傷を見つけたりする仕事はあまり忙しくなく、楽しいものではありませんでしたが、昼食の、丼にたっぷり入ったご飯は待ち遠しいものでした。

戦争末期のこの状態は戦後も続きましたが、そのうち闇屋が出始め、お金さえ出せば食事が取れるように変わっていきました。配給以外は口にしないと頑張っておられた著名な方が餓死されたとの報道には涙が出たものです。

私が今も住み続けている高輪三丁目から白金台二丁目の辺りは戦災にあわず、数年前まで関東大震災にも焼け残ったと言われる家がありました。強制疎開と言われ、街並みの一画の建物をすべて壊し更地にしたところに焼夷弾が落とされたのですから、ラッキーだったと言えるでしょう。

下町が壊滅状態になった3月の大空襲の時は、夜中というのにあまりの明るさに防空壕から出て、しばらく見とれていました。真っ赤に染まった東の空を敵機B29がゆうゆうと飛んでいます。さく裂する高射砲は全く当たらず、悔しい思いをしたものです。

5月の大空襲の時には地方にいましたので、東京にいる父母のことが心配で、いても立ってもいられない気持ちでした。当時は電話はほとんどの家になく、汽車の切符は統制で手に入りません。何とか夜行の切符を求め、身動きできないほど乗客をのせてのろのろ動く車内で、立ったままうとうとしても決して倒れることはありませんでした。東京に着いて山手線や京浜東北線の窓から目に入る風景は、ただぼう然とするばかりでした。特に大井町から蒲田にかけての一帯の被害がすごく、見渡す限り1軒の建物もない焼け野原へと変わっていました。

以前、大崎で小さい空襲に見舞われ、1軒だけ燃えてしまったことがありました。焼夷弾が天井を破って落ちてきたので、そばにあったご飯を入れるおひつのふたをかぶせて消しとめたという話と比べて、戦術の驚くほどの進歩に、大きなショックを受けます。

それでも、いつ神風が吹くのかしらと、心の隅をかすめます。日本は神国、鎌倉時代の元との戦いで神風が吹き元の船をしずめたこと、明治時代の日露戦争でも強いロシアの艦隊を日本海で破ったことなどから、日本は決して負けることはないと、強調されておりました。台風に巻き込まれたとか、ロシアには、はるばるアフリカの南をたどって来たハンデがあったからと理由を探りながらも、神風を期待する気持ちはぬぐいきれませんでした。「欲しがりません勝つまでは」を合い言葉に、本土決戦にそなえ、竹やりの練習をした人もいました。戦後何年も日本は敗れることはないという言葉を信じて、熱帯のジャングルで頑張ってこられた方のことも考えると、間違った教育の恐ろしさを身にしみて感じさせられます。

私の体験した太平洋戦争悲劇

鈴木 稔さん（85歳）

戦争中の一般の人々の被害等を記します。散文で順序なしです。私が実際に体験目撃をした事実です。

1 昭和17年4月18日午前、米空母より発進したノースアメリカンB25爆撃機を青山で目撃し即座に分かりましたが、我が国の軍隊は反撃出来ず中国大陸へと逃がしてしまいました。

2 昭和18年10月21日、明治神宮外苑競技場での学徒出陣式を、雨中直立不動挙手敬礼にて、スタンドで東京在住の男女中学生が見送りました。旧国立競技場が整地される前までは毎朝神宮プール向いの左正門の碑に向かい当日と同じように挙手の敬礼でお参りしていました。

3 昭和20年3月10日、陸軍記念日。東京下町の大空襲で火から逃れようと隅田川に飛び込んで溺死した方々を、芝浦海軍倉庫の岸壁から軍需品の納品時に多数見ました。

4 昭和20年5月25日、赤坂、青山、原宿、渋谷青山通り両側全域が爆撃され家屋全焼。残った建物は青山小学校コンクリート造り部分、現外苑前郵便局等でした。焼け跡のどこからも富士山が見えました。その時の惨状を語ると、青山通り表参道交差点の青山墓地へ逃げようとした人々が焼死体となり、人の体の脂が舗装道路アスファルトに染み込んでいました。その跡は、舗装をやり直すまで消えませんでした。東武浅草駅（浅草松屋）の2本の公道でも同じでした。

青山近辺のなきがらは警官がトラックに山のように積み、青山墓地に埋葬し、所持品で氏名の分かった方は墓標を建てました（現特別支援学校の土地です）。

5 当時の国道1号と省線（現JR線）の間には、木造の2階建ての民家が建っておりましたが、品川駅～札の辻付近の勤労動員で働いていた中学生と老大工さんが撤去をしていました。私たち中学生が家の壁を、老大工さんが柱を分担していた時、隣家が早く倒れかかり、我々の家が将棋倒しになりました。その時、親柱を半分切り終えた大工さんが家の下敷きになり亡くなりました。

6 空襲で悲惨な亡くなられ方をした人の例です。火にまかれ、普段使っていた汲み上げ井戸に先に入ったおじが後から井戸に飛び込んだ者に押し込まれ水死しました。私のまたいとこの父親です。

7 私の勤労動員先は沖電気高浜工場（芝浦と場と下水処理場の間）で、軍艦の水中聴音機を作っていました。当時の係長が5月25日の空襲で焼け出され、残った家財を渋谷から品川までリヤカーで運んだ時も、山手通りには焼死体が残されており、よけて運びました。

8 広島に原爆が投下されるまでは、ラジオで「敵B29機××上空を北上中」と空襲警報を伝えていても、「また偵察機か」と寝ていましたが、原爆投下を知って以降は、空襲警報が流れると防空壕で震えておりました。

9 戦時中の食糧事情についてです。米の配給は本来1合約150グラムですが、実際には満足にありませんでした。しかも、米でなく「農林1号」という酒精を作るサツマイモ

でまずいものでした。魚はホッケで、ラジオ放送でも毎日「本日の魚の配給は青山の何班ホッケ」とばかり流していました。

私たちは防火帯の空地を等分に区画し、かぼちゃ、サツマイモ等を栽培して飢えをしのぎ、青山墓地の野草を摘んで雑炊に加えていささかでも腹の足しにしていました。

10 一番悲劇だった人はある小学校6年生でした。

学童疎開から3月の卒業式のため親元にやっと帰って来たのに、3月10日の大空襲で焼け死んだのです。戦争は罪のない人々が苦しみ、死ぬ目に遭うのです（平和憲法が70年の無事、平和を守ってくれたのですね）。

11 戦後通勤・通学の人が増えた朝晩の交通の混雑の話。現在の地下鉄銀座線赤坂見附駅から青山一丁目駅の坂を、電圧が低く満員で上れずに赤坂見附駅まで戻り3分の1の乗客を降ろしてやっと上れました。

12 同じく省線や地下鉄がギュウギュウ詰め満員で身動きがとれない時に前の人のえりにシラミがうごめいても避けようがないという目に遭いました。ノミもいました。

13 戦争が終わり、学童疎開から帰宅した女の子の頭皮に食い込んだ毛ジラミの成虫や卵を取り除き、衣類の折り目に潜む卵の除去にも苦労しました。

14 私は勤労動員から戻り、赤坂区中ノ町（現・港区赤坂六丁目）の日本大学第三中学校に復学しましたが、赤坂区役所の要請で青山通り前の歩道に造られた防空壕の埋め戻しをさせられました。

15 現在軟式野球場などがある明治神宮外苑は、戦時中、慌てて高射砲陣地にし、その後米軍がソフトボール球場にしましたが、明治神宮に返還され、球場になりました。昔は一面手入れの行き届いた芝生でした。踏み込むと管理人さんに怒られました。

16 万一不幸にも戦争になり空襲を受けると、対空ロケット弾・高射砲弾の、20～30センチメートルの鋭い砲弾の破片がバラバラと落ちて来ますから、ヘルメット・防空頭巾や座布団で頭を保護しなければなりません。

幾代も暮らす町にむなしい戦争があった

松岡広恵さん（77歳）

戦争の足音がまだ、そんなに近くないころ、増上寺の正門から御本堂に続く参道に、大きな蓮のうてなの噴水があった。蓮の花が浮き上がり輝き、私はそこでお役僧の方に遊んで頂いていた。江戸から続く床屋の両親が、大僧正様のお剃髪に伺う日だった。その日噴水の右側に、竜舌蘭の一群が花茎を大人の丈より高く伸ばし、灯のような花を美しく咲かせていた。お役僧の方が申された。

「きれいでしょ、この花は百年に一度咲きます。咲くと良くないことが起こると言われます」少し悲しげな目と言葉を、3歳だったが、いつまでも忘れないで覚えていた。

家では、愛国婦人会麻布支部の祖母が、母やいろいろな方と慰問袋を沢山作っていた。どのぐらいの日がたったろうか、祖母は出兵なさる方の見送りに忙しくなり、着物を着替えて御遺骨を迎えに行くことが多くなった。

昭和18年4月、2人姉妹の姉が飯倉小学校に入学、戦時下の学校に給食があり、当番の日、私は見た。白いエプロンを着た母たちが黙々とアルミの器に、真っ白く輝くご飯をよそい、鴨の缶詰を皿に盛っていたのを。

小学校に入学したら美味な給食を食べられる。心ときめいた私だが、戦後夢は打ち砕かれた。とにかく輝いていた、あの真っ白なご飯、一粒一粒が美しかった、踊っていた。

やがて町は、食糧難となり配給や買い出しの日々となった。古いお客様の山崎様のご紹介で、お里の練馬に、お店の人たちと一緒に野菜その他を分けて頂きに行ったりした。

戦火が激しくなり、軍人さんの手を借り、故郷に帰るお店の方、残りたい方の嫁入りなど、物資の乏しい中嫁入り道具をそろえ、綿も手に入れるのが大変な時代に夜具をしつらえ、母が心を込めてお嫁に出した方が、幾日か後焼け出されたこともあった。店を守り、子育てをし、大切なお店の方たちに心配りを続けた、若い母の銃後の守りは険しいものだったと察する。

やがて所々に爆撃が多くなり、父の零戦との関わりで、私たちは山形に行った。

昭和20年3月10日東京大空襲の日、増上寺北側が焼け、5月25日南側が焼失した。芝公園の五重の塔が、塔の中央を避けるように、屋根の周囲だけ上から順に炎に包まれていく様が、まるで五輪のように見えたと、教えてくださる方もおられた。

雨あられのように焼夷弾が街を焼き、大使館近くの家並みを残しほとんどが焼き尽くされ、8月15日、戦争は終わった。が、終わった訳でもなく、農地改革と同様に区画整理が始まり、その時不在だった者は、少々不利でもあった。私どもも住居と家作2軒の坪数から、10坪ほど減らされ、3坪弱の空地を買い増しし今の坪数となった。10坪は無償の放出ではあったが、その後も区画整理事務所の方から、角地ということで当時のお金で7万～19万円の割り当て徴収があったと覚えている。区は赤坂区・麻布区・芝区を統合し港区となった。

昭和22年、バラックの店を再開したころのこと。慰問袋をおくった兵士の方が戦死し、その方々の御遺族がお越しになることが多くなった。母へ、亡くなった方の手紙や御遺品を届けてくださったのだ。その都度、母は浅草の観音様にお願いし、読経の中で祈った。「観音様の手のひらの内で沢山お休みください。そしてこちらの世にお戻りくださいますように」と。

明治から、親族が「桶広」という名の桶屋を営んでおり、勤勉で、多くの土地を持っていた。疎開で母の伯母たちは、従姉妹の婚家の福島の寺に行かれた。戦後、区画整理後、預けた土地も、その方や別の方の所有になってしまった様子だった。区画整理にも関わった婦人が、大人になった私に「あの土地は桶広のために残したのに」と言われた。戦時中、戦後には多くあったと聞くが、あまりにもむなしい。

生きた者たちももだえ苦しみ涙する日もあった。空襲で、戦地で大勢の尊い命が失われ、散華なされた方々の犠牲の上での平和、生きよと己を楯にした方々の想いを忘れられない。

数年前、増上寺の御本堂のすみに、爆撃を受けた当時の噴水の残骸が置いてあった。それを見た時は、震えるほど恐ろしく悲しかった。一瞬灯のような花弁が浮かんだ。幼い私がいた。

―― 青空や　打水手向けの　水として

INTERVIEW ● 上松洋子さん

空襲から命がけで逃げ延びた女学校時代。人間が人間ではない生き方をしていた、あの頃。

足立真優子（あだち・まゆこ）
慶應義塾大学1年生
19歳
インタビュアー

日中戦争が勃発した幼少期から、太平洋戦争が深刻化した女学校時代を芝で過ごされた上松洋子さんは、戦争とは無関係な文学少女だったにもかかわらず、戦況の変化とともに変わりゆく世の中を見つめてきました。その純粋な目に、生きる道を自分で決められない人々の姿はどう映ったのか。港区が焼け野原と化した東京山の手大空襲など、日々の暮らしに密着したエピソードも数多くお話しくださいました。

日本は強い、正義の戦いなのだ 戦果が祭典のようだった日中戦争

足立 ―― まずは少女時代の暮らしぶりから伺いたいのですが、ご実家は港区内（芝）で運送業を営まれていたとお聞きしました。

上松 ―― 軍に依頼されて、軍隊関係の食料物資も運んでいたらしいですね。当時はそういった情報は家族にも秘密だったので詳しくは分かりませんが、おかげで他の家よりは食べ物に恵まれていたと思います。埼玉出身のトラック運転手さんが多かったので、戦時中は彼らの実家からお米を売ってもらっていたようです。

足立 ―― 戦時中も、食べ物には困らなかったのですか？

上松 ―― 食べ物は配給制でしたから、ねえや（お手伝いさん）は大変だったと思いますよ。家族5人なのに野菜が大根のかけら5センチメートルぐらいしかなくて、どうしましょう

戦争体験者 上松洋子（うえまつ・ようこ）さん （85歳）

昭和5（1930）年、芝生まれ。家業は運送業で、軍関係の食料輸送を請け負うこともあった。赤羽国民学校（現・港区立赤羽小学校）から府立第六高等女学校（現・三田高校）に進み、空襲で三田の自宅が焼失したため、運送会社の営業所があった埼玉県草加市に疎開。終戦直後は母方の実家・鳥取県にも一時疎開。戦後に自宅が再建され、東京女子大学に進学。現在も港区に居住。

※マンガは、現代の若者が戦争・戦災を追体験するというコンセプトで描かれています。

と困っている姿を目にしましたから。それでも何とか工面してくれたらしく、私には〝食べ物に困った〟という覚えがないんですよ。女学校時代の勤労動員でも、白米に海苔が敷かれた海苔弁当を持って行けましたから。

足立 ―― お米があるだけで、食事には困らなかったという感覚なのですね。

上松 ―― そうでしょうね。勤労動員先の工場には給食もあったのですが、これがアルマイトの器に盛った、粗末なものでしてね。残せば食べ物を粗末にしたと怒られるので、お友達と目黒川のほとりへ行き、こっそり捨てていました。

そうそう、その給食に、赤いコーリャン米に黄色のトウモロコシ粉を混ぜた、キレイなご飯が出て珍しかったことはよく覚えています。白米のお弁当がなければ、すごいごちそうのように感じられたかもしれないですね。

足立 ―― 普段の生活に、戦争の影響を感じることはありましたか？

上松 ―― 「支那事変」(日中戦争)が起きた頃も、怖いとか戦争が始まったという意識はなかったですね。南京陥落時も祭典のような感じで、ねえやと一緒に弟2人を連れ、提灯行列で大賑わいの日比谷通りを皇居前まで歩いて行きました。日比谷の交差点を、電飾などで飾り付けした路面電車が何台も走っていましてね、すごくキレイでしたよ。南京で起きた事件のことなど知りませんし、まだ子どもでしたから、可愛らしい提灯を下げて夜に外出できることが嬉しかったんですね。

ただ、「日本は強い、これは正義の戦いなのだ」といったメッセージの軍歌を、誰もが歌いながら歩いていたことは記憶に残っています。だからといって、自分が戦争を意識することはありませんでしたが。

コラム 15 ● 南京陥落（なんきんかんらく）

日中戦争で中国大陸に進出した日本軍は、上海から当時の首都だった南京に進軍。国民政府は重慶に遷都したが、日本軍は昭和12(1937)年12月から南京への総攻撃を開始し、12月13日に陥落させた。この報を知った全国各地では祝賀行事が催され、民衆が「日本勝った、また勝った」などと歌いながら提灯行列を成した。東京でも皇居周辺を祝賀の群衆が埋め尽くし、約40万人の都民が提灯行列に参加、誰もが万歳三唱したという。日比谷～銀座周辺には、電飾もまばゆい花電車(特別な装飾を施した路面電車)が走った。

南京陥落を祝うダンサーたちの提灯行列。昭和12年、赤坂で撮影(提供：朝日新聞社/時事通信フォト)

勤労動員に出征兵士の見送り……女学生にも戦争が身近なものに

足立 ――その後の日本は太平洋戦争に進んでいきますが、学校の教育などには変化が現れましたか？

上松 ――初めて戦争を意識したのは、小学5年生のときに起きた真珠湾攻撃だと思います。先生から「九軍神の方たちが潜水艦（特殊潜航艇／甲標的）で突っ込み、素晴らしい戦果を挙げたのだ」と、お話がありまして。私たちのような子どもに聞かせるのがもったいないほど尊く、立派な行為だと教えられたものです。今になって思えば、大変な犠牲者の方たちなのに……。

第六高女（第六高等女学校：現・三田高校）に進むと、ほふく前進の訓練などもさせられました。体のあちこちが痛くて、ヘトヘトになったものです。昭和19（1944）年には五反田から第二京浜のあたりが空襲され、先生の奥様が亡くなられるなど、戦争を意識する機会も増えていきました。

2年生からは、勤労動員で軍需工場へ働きに行きました。私のクラスは、卒業生のお父様がやっておられる工場に派遣されたので、恵まれていましたね。ご自宅を開放してくださるなど、待遇がすごく良かったんですよ。他のクラスは東芝や沖電気、日本電気などの大きな工場が行き先で、大変だったそうです。みんな13～14歳で、勤労動員の学生では最年少でしたから。

私たちが行った工場では、零戦のメーターを作っていたようです。アルミニウム製のメーターに夜光塗料を塗る仕事でしたから、たぶんそうなのだろうと……。でも、戦況の悪化とともに材料が不足し、何も作れなくなってしまいました。

戦争末期にはしょっちゅう空襲警報が鳴り、作業よりも防空壕に入っている時間のほうが長かったかもしれません。防空壕の中ではすることがないので、持っていった文庫本を読むのが日課でした。岩波文庫を1日3冊ぐらいは読んだ記憶があるので、かなり長時間でしょう？『風と共に去りぬ』など、アメリカの小説も防空壕の中で読みましたよ。

工場へ向かう途中で空襲警報が発令され、電車が止まってしまうこともありました。それでも行かなければならないので、空襲を恐れずに歩くしかない。朝はいつも、母とねえやから「もう会えないかもしれない」と送り出されたものです。その度にねえやが涙ぐんだりして、毎朝が今生の別れのようでしたね。

足立 ――警報が鳴る中、怖くはなかったのですか？

上松 ――感覚が麻痺していたのか、怖さに鈍感で、死に対する実感もなく、それが当たり前の生活になっていたんですよ。今思えば、異常ですよね。

戦争と悲しさを実感したのは、山本五十六さんのお葬式でした。新聞には毎日のように、「○○を撃沈、大戦果」と派手な見出しが躍っているのに……。日本は戦争に勝てないのかもしれないと、あのときは思いました。もちろん、口には出しませんでしたけれど。「壁に耳あり障子に目あり」で、憲兵隊に連れていかれる人がたくさんいるのだから、余計なことを話さないように。母からも、そう注意されていたので。

知り合いに飛行機好きな中学生の男の子がいまして、その彼が勤労動員で調布の飛行場で働いていたんですよ。で、飛んできた飛行機に「あれは何型で、これは何型……」などと大喜びしていたところ、憲兵隊に連行されてしまった。大好きな飛行機が見られて嬉しかっただけなのに、（軍事機密の兵器に詳しいからと）スパイ疑惑をかけられたらしいんですね。殴る蹴るの暴行を受けたそうで、男の子は大変だったんだなと思ったものです。

母の実家がある鳥取県米子市の田舎に疎開した弟たちは、通学途中に

コラム16 ● 九軍神（きゅうぐんしん）

真珠湾への奇襲攻撃には小型特殊潜航艇“甲標的”（2人乗り5隻・計10人）も参加し、空爆と呼応して湾内に進入、米軍艦に魚雷攻撃を仕掛けた。実質的な特攻作戦で、9人が戦死。戦果は未詳だが、9人は対米戦における初の戦死者として英雄扱いされ、将兵や国民の模範となるべく“九軍神”と崇められた。新聞でも「不滅の偉勲」と大々的に報じられ、日米開戦の象徴ともなった。9人の合同海軍葬には、多くの民衆が参列したという。なお、1人が捕虜となったことは戦後まで伏せられた。攻撃訓練が行われた愛媛県伊方町に、今も慰霊碑が残る。

愛媛県伊方町に建立された、九軍神の慰霊碑（提供：伊方町）

機銃掃射で友達が亡くなるなど、私よりも戦争を身近に感じていたようですね。

足立 ―― 出征兵士の見送りも経験されたのですよね。

上松 ――「今日は○○ちゃんの家で出征だから」と、それはもう毎日のように。旗屋さんに出征兵士を送るきれいな旗がありましてね、みんなでそれを振り、「勝ってくるぞと勇ましく」と歌いながら見送るんですよ。街角に立って、千人針のお手伝いもしましたね。

見送りは勇ましいものでしたが、家族の方はみんな泣いていましたよ。「帰ってらっしゃい」と言ってはいけないことになっていましたから、誰もが悲しみを口にしない、仮面行列のように感じられました。出征する方も、死ぬことは当たり前という感覚で行かれたのだと思います。

私の従兄弟も出征したのですが、やはり覚悟していたのか、嫌だとも何とも言わなかったですね。家族にしても、探してきた貴重な鶏肉に配給の野菜をかき集め、すきやきを作ってあげるぐらいしかできない。人間が、人間ではない生き方をしていた時代だと思いますね……。

命からがら逃げた東京山の手大空襲 自宅は焼失し一面が焼け野原に

足立 ―― その後は昭和20（1945）年3月10日の東京大空襲など、東京でも空襲が激しくなっていきます。5月25日の東京山の手大空襲では、港区も大きな被害を受けたと聞きました。

上松 ―― 直前の5月23日にも空襲があり、行きつけの写真屋さんが、預けてあったフィルムともども燃えてしまいましたから。寝るときも服を着たままで、防空頭巾を枕元に置くなど、いつでも逃げられる準備だけはしていました。あの頃の何カ月間は、パジャマに着替えて寝る日などなかったですね。

5月25日は夜12時近くでしたか、警戒警報が空襲警報に変わり、防空壕へ逃げるよう指示されました。でも、自宅の防空壕は床下に穴を掘り、トタン板で覆っただけのもの。工場のように、30人のクラス全員が入れるほど立派な防空壕ではないですから、焼夷弾が落ちたら焼け死んでしまう。なので、ねえやと2人で外へ逃げました。

会社がある父と、隣組の組長だった母は、家に残りました。少し前に金杉橋の肉屋さんが爆弾で被害を受け、奥さんが重傷を負われましてね。そのときも母は、血が滴る担架を運んでいたんですよ。隣組組長として近所の人たちを守らなければという責任感から家に残り、私をねえやに託したのでしょう。「芝公園へ逃げなさい」と私たちを送り出したものの、後から芝公園が高射砲陣地になっていたことに気づき、「死ぬために行かせたようなものだ」と大慌てで探しに出たそうです。

私たちの方は、その頃はもう芝公園から逃げ出していました。B29が超低空で、頭のすぐ上まで飛んできたように感じましたが、実際にそんなわけはないので、それほど怖かったということでしょうね。すぐ近くに焼夷弾が落ちて、油脂が身体に飛び散ったこともありましたよ。量は少しでも火がくすぶっていたので、近所のお兄さんが古川の水を汲み、消してくれました。

赤羽橋から芝公園、日比谷、虎ノ門の辺りではたくさんの人が亡くなったようですが、幸いにも死骸を目にすることはなく、芝公園を突っ切り、金杉橋に逃げられました。三田から赤羽橋の交差点辺りは、人の手足があちこちに散らばり、ひどいありさまだったそうです……。

両親とは、増上寺の門前で合流することができました。芝園橋で出会っ

コラム17 ● 戦時中の衣服

戦争の長期化とともに、庶民の服装も戦時下の影響が色濃くなっていった。昭和15(1940)年11月には、政府が提唱する“国民精神総動員”の一環として、国民が常用すべき服装として国民服を国民被服刷新委員会が制定。色は国防色(カーキ色)で、上衣・中衣・袴(ズボン)・外套・手套・帽子・靴からなり、甲号と乙号の2種類のデザインがあった。のちに婦人標準服も制定され、スカート(甲号)や和服(乙号)もあったが、あまり普及しなかった。代わりに女性にはもんぺが流行し、防空頭巾にもんぺという服装が一般化した。

乙号の国民服。昭和19(1944)年撮影(提供：昭和館)

た（幼少期の）お稽古の先生から、両親が増上寺で私たちを探していると聞いたものですから。あの先生に会わなければ、両親と離れ離れになっていたかもしれません。

足立 ――ご自宅は焼けてしまったのですか？

上松 ――ええ、家も含めて周辺は焼け野原と化し、何もかもがなくなっていました。家の跡に残っていたのは、真っ赤になるほど熱くなった金庫だけ。お風呂場があった場所では、積んであったコークス（石炭）が燃えていましてね。おしるこを作ってもらうのが楽しみだったのに、小豆などもすべて燃えてしまってすごく悲しかったです。

芝公園の五重塔が焼け落ちる様も目にしましたし、東京の街があれほど無残な光景に変わってしまうとは……。芝公園はひなたぼっこをしながら読書に耽る、大好きな場所だったものですから、とてもショックでした。

玉音放送とあふれる終戦の喜び 着るものに飢えていた戦後の暮らし

足立 ――その後は、埼玉県草加市に疎開されたのですよね。玉音放送も、草加で聞かれたのですか？

上松 ――ええ。家にラジオがあったので、ご近所の人も集まり、家族揃って聞きました。ラジオの前で、ちゃんと正座もしましたよ。昭和天皇のお声もよく聞き取れない放送でしたが、情報通だった父は、日本が戦争に負け、玉音放送が行われることを事前に知っていたようです。

一方私は、「戦争が終わった！」という解放感から大喜びでしたね。とにかく晴れ晴れした気持ちだったことを、今も思い出します。

足立 ――終戦直後は、やはりいろいろと混乱があったのでしょうね。

上松 ――「米軍が上陸すると女・子どもを差し出さなければならない」という噂が飛び交い、心配した父は、母と私を米子へ疎開させました。ねえやも新潟の実家に帰し、しばらくは家族が離れ離れでしたね。

当時は汽車に乗るだけでも大変で、長距離切符など買えない時期でしたからね。母のツテで運良く切符だけは手に入ったものの、汽車は人でいっぱい。乗車口からは乗れず、食堂車の調理場に押し込まれましてね。コンロの上が〝座席〟で身体は痛かったけれど、そこに座れるだけでも恵まれていたのだと思います。

京都駅で汽車を乗り換える際には、ホームで進駐軍のMP（憲兵隊）も見かけました。肌が白いのに顔は赤くて、赤鬼のように思えましたよ。警棒を持ってヘルメットを被った姿が、すごく怖かったことを覚えています。

足立 ――当時、いちばん苦労されたことは何でしょうか。

上松 ――そう……。着るものがなく、「服に飢えていた」ことかしらね。戦時中は肌着から足袋まですべてが配給制でしたし、終戦になったからといって、すぐに服が買えるわけもなく。

母が洋裁学校で教わり、私が着るものは下着から服まで縫ってくれていました。でも、肝心の生地が手に入らない。お店のショーウインドウに生地がかけてあるのを見かけたなら、すぐに「売ってほしい！」と駆け寄るような毎日で。そうでもしなければ、本当に着るものがなかったんですよ。

私が東京女子大に合格してからも、着て行ったのは白い毛布で仕立てたオーバーですもの。元は毛布ですし、色も白だからすごく目立って、嫌な思いをしましたね……。

上松さんからのメッセージ

自分が納得できるまで情報を確認して、生きる道を決めてください。自分の目で見て、判断する見識を身につけてほしい。私たちはそれができずに、苦労しましたから。戦争とは、やろうとして始めるのではなく、些細なことがきっかけで起きてしまうのだと思います。始まりは簡単でも、終わらせるのは大変なことなんですよ。ですから、戦争など起こらず、みんなが共存共栄し、仲良く暮らしていける世の中であってほしいですね。

INTERVIEW ● 沢田久次さん

「空襲と戦う少年」としてラジオ番組の題材に。日本が戦争に負けるなど信じられなかった……

佐々木 嶺（ささき・りょう）
東海大学3年生
21歳

山﨑朱莉（やまざき・あかり）
郁文館グローバル高等学校3年生
18歳

佐藤 宝（さとう・たから）
日出高等学校2年生
17歳

インタビュアー

お父様が芝神明で「駿河屋」という茶舗（茶を販売する店）を経営されていた沢田久次さんは、商業学校在学中に大きな空襲を体験されました。避難時にはご近所の人々を引率し、焼夷弾の被害から救ったそうです。それらの体験談の数々は当時のNHKラジオ番組で「空襲と戦う少年」と題し、放送されました。勤労奉仕に従事する学生として称賛されるなど、戦時下の東京で奮闘された沢田さんだけに、終戦時には「日本が負けたとは信じられなかった」とも語られました。

軍隊で苦労しないよう大学へ進学「戦争へ行く」のは必然でした

沢田――まずは、私の簡単な経歴から話しましょうか。生まれは新橋六丁目でして、近くの桜川小学校（現・御成門小学校）に通いました。2年生のときに芝宮本町（現・芝大門一丁目）に引っ越し、静岡県の出身だった父が茶舗を始めました。家があった芝神明通りは、当時の港区では一番栄えた商店街だっただけに、人が多くて自転車も通れないほど賑やかでしたよ。その後は神田の商業学校に進み、5年生のときに初めて空襲を体験しました。

山﨑――**ご実家の茶舗は、大きなお店だったのですか？**

沢田――間口が3間（約5・5メートル）ぐらいだったかな。当時から、静岡はお茶の

戦争体験者 沢田久次（さわだ・ひさじ）さん （88歳）

昭和2（1927）年、芝区（現・港区）新橋生まれ。7人兄弟の次男（姉・兄・妹4人）。尋常小学校2年生時に芝宮本町（現・芝大門一丁目）へ転居し、父親が芝神明に茶舗を開業。その後は商業学校から明治大学に進学。家族が静岡県に疎開した戦争末期も東京に単身で残る。終戦時は大学1年生。現在も港区に居住。

※マンガは、現代の若者が戦争・戦災を追体験するというコンセプトで描かれています。

名産地でしたからね。

山﨑 ―― 商業学校の様子も教えていただけますか。

沢田 ―― 60人ぐらいの組が3つあり、そのうち2組半ぐらいはサラリーマン、他は商人の息子でした。自分のように大学（明治大学）へ進んだ生徒は、1割ぐらいしかいなかったはず。私にしても、勉強するために大学へ行ったわけじゃないんですよ。

山﨑 ―― 何のために進学されたのですか？

沢田 ―― 兵隊で中国へ行っていた兄から、「どうせ軍隊に取られるのなら、勉強しておけ」と勧められましてね。大学を出ていれば士官候補生として軍隊に入れるので、階級がすぐに少尉なんですよ。兄は中学を出ただけの一兵卒でしたから、弟に軍隊で同じ苦労をさせたくないと思ったんでしょう。私自身、勉強よりも戦争ごっこが好きな子どもでした。

山﨑 ―― お兄さんが戦争に行かれたのは、いつ頃だったのですか？

沢田 ―― 大東亜戦争開戦から、まだ日本が優勢だった頃ですね。私の兄は背が小さくて徴兵検査に不合格だったのだけれど、どうしても入隊したいと頼み込み、合格にしてもらったそうです。入隊から約10日後には、すぐ中国へ渡ってしまいました。

佐々木 ―― 当時はやはり、「勝ってくるぞ」という戦時色一色でしたか。

沢田 ―― そうですね。負けるなんてことは、頭にないですから。私

コラム 18 ● 空襲警報（くうしゅうけいほう）

戦時中の警報には“警戒警報”と“空襲警報”があり、ラジオやサイレンなどの手段で伝達された。昭和12（1937）年制定の防空法では、警戒警報が「航空機ノ来襲ノ虞アル場合」、空襲警報が「航空機ノ来襲ノ危険アル場合」と定められていた。日本領空にB29が侵入すると警戒警報（“ウ――”という長いサイレン）が鳴り、灯火管制と避難準備。B29の進路が定まると空襲警報（“ウーウー”と抑揚をつけたサイレンや半鐘の乱打）、防空壕への避難指示という、2段階の警報体制だった。愛知県名古屋市では大本営の判断ミスから警報解除後に空襲があり、2,000人以上が犠牲となったことも。

大分県別府市に今も残る、空襲警報に使っていたサイレン（提供：別府市）

にしても「いずれは自分も戦争に行くんだ」と、当たり前に考えていました。当時は何もかもが軍事一色で、真珠湾攻撃など勇ましい出来事もあったので、そうしたものに憧れていたんでしょうね。

山﨑――**子どもの頃から、軍に憧れを抱かせるような世の中だったということでしょうか。**

沢田――それはあったと思いますよ。小学校低学年で二・二六事件（昭和11年）が起きたときなんかね、トラックに武装した軍人がたくさん乗って、赤坂のほうへ向かうわけですよ。子どもながらに、カッコイイと思ったなぁ。警察官に危険だから帰れと怒られるまで、ずーっと眺めていましたよ。

大学に入ってからも、学校行事として富士山の裾野へ戦闘訓練に行きましたね。3日間ほどの、合宿のような形で。ちょうどその最中ですよ、広島に新型爆弾が落ちたらしいと耳にしたのは。それが原爆だとは後から知ったけれど、そんな終戦間際まで、戦況の悪化に気づかなかったということでしょうね。

空襲で家が焼けても国のため……勤労奉仕が当然な世の中でした

山﨑――**商業学校時代は勤労動員に行かれたそうですが、当時の勤労動員についても教えてもらえますか？**

沢田――戦争で男手が足りないから、大人だけでなく学生も工場で働くんですよ。勤労動員が本格化してからは、商業学校での授業もほとんど行われなくてね。朝から直接、工場へ行くわけだから。9時から16時頃まで工場にいるので、昼間の街中に男はほとんどいなかったんですよ。私だけは、大学進学の関係で家に残ることも多かったけれど。

当時の商業学校は、普通に卒業しても大学進学の資格が取れなかったんですよ。ただ、教練など専門教科を3科目ほど履修すると、その資格が得られた。そうした生徒は、勉強を理由に勤労動員から免除される機会が多かったんです。

佐藤――**工場では、何を作っていたのですか？**

沢田――機械の部品らしいけれど、何に使われるのかは軍事機密で、わからなかったですね。部品の一部を渡され、指示は「ここにこれをハンダ付けしなさい」、「この線とあの線を繋ぎなさい」などの細かい作業だけ。何の部品なのかも分からないまま、毎日のように同じ作業を繰り返しました。社会人は多少の給料をもらえたらしいけれど、学生の私たちは無料奉仕でしたね。

佐藤――**空襲の翌日に勤労動員へ行かれたこともあったそうですが。**

沢田――家にいてもすることがないし、他に行くところもないから、知り合いが大勢いる工場へ行ったほうが気持ちが楽だったんですよ。おかげで、「空襲で家が焼かれても、国家のため工場で働いた」と褒められてね。そんなつもりはなかったのだけれど……。

焼夷弾で父が負傷しながらも街の人々を空襲から救った夜

佐藤――**昭和19（1944）年11月30日には港区内も大きな空襲に見舞われたそうですが、その様子を教えてください。**

沢田――あのときは芝や日本橋など、都内で5カ所ぐらいが集中的に爆撃されました。空襲警報が鳴ると同時に、焼夷弾が雨あられのように落ちてきて。空中で炸裂し、バラバラに落ちてきた子爆弾が、地面に落ちると同時に「バーン！」と炸裂するんですよ。火の付いたゴムのような物体が、家々の壁に飛び散ってね。壁にくっつくと、すぐに燃え広がってしまう。父はそれを体に受けて、大やけどを負いました。

コラム 19 ● 焼夷弾（しょういだん）

建造物や陣地の燃焼破壊を目的に、可燃性が高い焼夷剤と炸薬を充填した爆弾のこと。米軍機は日本の木造家屋向けに特化開発されたM69型を子弾とした、E46集束焼夷弾（クラスター爆弾／親子爆弾）を投下。M69は1発が直径8cm・全長50cm・重量2.4kgで、E46はこれを38発も内蔵していた。空襲では空中にて分離したM69が降り注ぐため、直撃を受けて全身が燃え上がり即死する例も多かった。投下された様は、火の雨のようにも見えたという。他に、貫通力を増したM50型（M17集束焼夷弾）も使われた。米・独だけでなく、日本も中国・重慶を空爆する際、焼夷弾を用いている。

焼夷弾が炸裂した瞬間（出典：『写真週報』261号、提供：アジア歴史資料センター、国立公文書館蔵）

佐々木 ― 空襲警報が鳴ってからB29の飛来までは、すぐだったのですか？

沢田 ―― すぐというより、来てから鳴るぐらいの感じかな。B29は富士山を目標に日本上空へ飛んできて、そこから右に行けば関東、左に行けば東海から関西が目標なわけですよ。その方向がわかってから警報が鳴るので、その頃にはもう上空へ来ているんですよね。高度1万メートルぐらいなのかな、日本の戦闘機がB29を攻撃している姿も目にしましたよ。そのB29は、赤坂や東京湾のほうに落ちたそうです。

佐藤 ―― 警報が鳴ると、逃げるんですか？

沢田 ―― 庭の防空壕へ走るのだけれど、私の家の辺りは、庭を1メートルも掘ると水が出てきちゃうんですよ、海抜が低いから。だから深くは掘れないし、気休め程度のものでね。それでも、そこに逃げ込むしかなくて。

そして空襲が終わって外に出ると、辺り一面が火の海。用意しておいたバケツの水なんか、意味がなかったですね。一部を消しても無駄なほど、火の勢いがすごかったから。もう逃げるしかないので、洋服などが風で飛ばないように、石を置いて逃げましたよ。頭から水を被ってね。でも、みんな燃えてしまった。何一つ残らず、きれいに焼けてしまって……。

逃げるといっても、街に残っているのは女性ばかりなので、私が20～30人の女性を連れて逃げました。明徳幼稚園（現・芝公園四丁目／増上寺）の辺りが当時は山で、横穴式防空壕が掘られていたため、そこへ避難しました。でも、逃げ込んですぐ、入り口に焼夷弾が落ちて。そのままでは焼け死んでしまうから、今度は愛宕下の青松寺へ逃げました。あそこは焼けなかったので、数日間ほど滞在したのかな。周辺の皆さんが布団や食器などいろいろなものを差し入れてくれたおかげで、何とか生活できました。こういった空襲体験は、当時のNHKラジオでも紹介されたんですよ。

後になって、私の面倒をよく見てくれていた警察官の方が、その青松寺で直撃弾を受けて亡くなったとも聞きました。私たちも、少し時間がズレていれば助からなかったかもしれません。

佐藤 ―― 家が燃えてしまってからは、どうやって生活されたのですか？

沢田 ―― 近所に家を借りました。あの頃は疎開して無人の家が多く、持ち主が「使ってください」と開放していたんですよ。多くの家が疎開し、街には子どもがほとんどいなかったですよ。私の妹たちも、静岡県焼津市の親戚宅へ疎開していました。

空襲で父がやけどを負った後は、両親も静岡市内の親戚宅に疎開しました。静岡は東京よりも病院や医者の環境が良かったので、父の治療にもその方が良かったのでしょう。父は静岡県の出身なので、向こうには親戚が多かったんですよ。

佐藤 ―― 静岡にも空襲はあったのでしょうか。

沢田 ―― 私が静岡へ行った際も、空襲に遭いました。そこで、いまだに忘れられない光景を目にしましてね。赤ん坊をおぶった親戚が、何かの事情で防空壕から出たところに焼夷弾が落ちたんですよ。子爆弾が赤ん坊の頭に当たり、何か音がしたなと思った次の瞬間には、赤ん坊の首から上がなくなっていて……。あれは惨めでしたね……。

佐々木 ― 静岡へは、よく行かれたのですか？

沢田 ―― 両親や妹たちに会うため、ちょくちょく行きました。汽車の切符が買えないので、苦労しましたよ。当時は、（乗車券の発売制限があったため）東京から大船までしか切符が買えなくてね。だから夜、線路からこっそり列車に乗り込んで。車内検札は座席の下に潜り込んでやり過ごし、焼津駅近くになると列車から飛び降り、一目散に逃げました。お金を出しても切符が買えないのだから、そうするしかなかったんですよ。

コラム 20 ● 憲兵隊（けんぺいたい）

明治時代に創設された、陸軍大臣が管轄する軍直属の軍事警察組織。軍隊内や軍人絡みの犯罪を取り締まる軍人（兵士）組織だが、司法警察権を持つことから、治安警察法や治安維持法の発令下では一般国民に対しても権力を行使できた。そのため反戦思想家やスパイ容疑者の取り締まりなど、次第に国民を弾圧する立場となっていった。終戦後はGHQによって解体され、昭和27（1952）年の対日講和条約（サンフランシスコ平和条約）発効まで、元・憲兵隊員は公職に就くことが禁じられた。B・C級戦犯裁判で有罪判決を受けた者のうち、約3割は憲兵だったという。

GHQが接収した九段下の旧憲兵隊本部
（提供:共同通信社）

海苔がごちそうだった 苦境を生き抜いた誇りとは

佐々木 ― 玉音放送を聞かれたときは、負けたことが信じられなかったそうですね。

沢田 ――聞いたのは、大学近くにあった憲兵隊の分室です。どこも焼けてしまい、ラジオなんて他では聞けなかったのです。いいラジオだからよく聞こえたけれど、負けたと信じられる人は誰もいなかったですよ。「そんなバカな話があるか!」と。私も、日本が負けるなど考えもしなかったから、ピンとこなかったというのが正直な気持ちです。

佐々木 ― 戦後は、埼玉のほうへ買い出しに行かれたとか。

沢田 ――埼玉で暮らす親戚から、サツマイモを売ってもらっていました。汽車が超満員なので、埼玉へ行って帰るだけでも大変でしたよ。列車の窓まで、人がいっぱいでしたから。それでも何とか乗り込み、立川まで戻ってくると、警察官が待ち構えていましてね。買ってきた物をみんな没収してしまう。買い出しは闇物資だからと。ただ、学生服で行っていた僕は「お前は学生か、なら許してやる」と、特別に見逃してもらえたこともあります。

佐々木 ― 当時の生活費は、どのように賄われたのですか?

沢田 ――茶舗を続けていましたからね。売るお茶は、ほとんどなかったけれど……。静岡から来る仲買人が、背負った袋に詰めてきたお茶だけなので。もちろんそれも、厳密には闇物資ですよ。

山﨑 ――戦前~戦時中~戦後の食生活には、大きな変化がありましたか。

沢田 ――うーん、それほど変わったという感覚はないですね。サツマイモがあれば、それほど不自由は感じなかったというか。お米はね、一斗缶に入れ、隣近所どうしで防空壕に保存していたんですよ。そのお米があったおかげかもしれない。当時の芝あたりは、隣近所みんなが親戚のような暮らしぶりでしたから。物がなくなった戦争末期も家には私一人なので、特に困ったという記憶はないですね。おかずがないので、ごはんに塩をかけて食べたりはしていましたが。

山﨑 ――当時のごちそうといえば、どんなものでしたか?

沢田 ――海苔ぐらいかなぁ。私の家は茶舗なので、海苔も扱っていましたから。

佐々木 ― 甘いものは食べられたのですか?

沢田 ――お菓子のようなものは、ほとんどなかったですよ。日本橋の甘味処「栄太楼」さんが饅頭を作ってくれ、毎日のように販売するのだけれど、朝早くから大勢の人が並んでね。すぐに売り切れてしまう。砂糖などの原料自体が配給制だから、多くは作れなかったんでしょうね。私たちは商売の繋がりもあって、少し分けてもらえたりしたのだけれど。

沢田さんからのメッセージ

戦時中はつらかったかと聞かれても、一番血気盛んな年頃だったので、不自由を不自由と思わなかったんですよ。当時は、それが当たり前でしたし。ただ、あのつらい時代を生き抜いたという、誇りのようなものはあります。戦争は人殺しだからダメだけれど、戦時中の暮らしや苦労は、多くの人が体験してもいいんじゃないかとも思います。恵まれすぎて、何不自由なく暮らせることが、いいことばかりだとは思えないので。昔の人は今のような個人主義に走りすぎていなかったことも、知っておいてほしいですね。誰もが周囲や世間のために、いろいろなことをしてあげていましたから。

私の戦争体験

鵜飼良彦さん（86歳）

昭和4年12月23日、芝区二本榎二丁目で生まれた。高松宮家を始め、北白川宮、竹田宮家などの屋敷も並ぶ、高級住宅街の中にある商店街の一角に住んでいた。以来85年この地で生活してきた。大東亜戦争が始まって3年目の中学3年の5月より勤労動員で第一京浜国道の解体に従事、19年10月より大森駅近くの東京軽合金製作所という軍需工場に配属される。

砂を鯨油で固め軽合金を注入し、飛行機の気筒管を作る作業だ。昭和19年に多くの工員が召集され人手がなくなり、14歳の少年に、1200度の軽合金をひしゃくに入れ木型に注入する仕事が与えられたのだ。「1、2の3」で4人1組早足で一気に合金を注入する。それは例えようのない熱さだ。4日目に私の組の一番前の友人がつまずいて、頭から顔面にかけて合金をかぶってしまった。すぐ病院に運ばれたがそれ以後音信不通である。当時動員で来ていた明治大学の5人の学生が「このような仕事をこんな少年たちにさせるのは危険ではないか」と工場長に抗議してくれた。それ以来仕事からはずされることになった。昭和20年3月10日、静かな高輪の空に何百機かと思われるほどのB29が飛来、十数分後上野方面に真っ赤な火の手が上がり、夜なのにお互いの顔がわかるほど明るくなった。翌日工場に行くと級友1名が出勤していないので調べてくるようにと言われ墨田に向かったが、ようやく上野駅に着くとそこは多くのけが人などで混乱し、見渡す限りに焼け野原、まだ白い煙が上がっている。遂に級友一家は不明のままであった。

5月、調布飛行場に乙種特別幹部候補生として入隊する。鉄かぶとと地下足袋を支給され、午前8時から午後5時まで滑走路近くの竹やぶ沿いに塹壕掘りだ。4日後の午後、空襲警報と同時に猛烈な艦載機の空爆。穴の中に伏せていたがこれで死ぬのかと思った。

間もなく攻撃が終わり、地上に出るとB29の編隊が頭上を飛んで行った。1機遅れて来たB29に向かって5機の友軍機が襲いかかるが、すぐ黒煙と共に墜落して行く。その中の1機がB29の右下方よりキラッと光った瞬間、B29の胴体からものすごい黒煙が上がりぐんぐん下降して行く。引率の伍長が「見ろあれが神風特攻だ。あの兵士は今から軍神である。黙とうせよ」と言った。皆、一斉に1分間の黙とうをした。兵舎に戻ると滑走路は大穴だらけで何もなく、「貴様らは、20年9月1日集合」と言われ帰宅する。5月末、家にいると空襲警報のサイレンとともに大きな爆発音がした。現在の黄梅院の前の通りが火の海だった。駆けつけると「砂だ」「土だ」と言う声が飛びかっていた。

その先の芝信用金庫の奥（承教寺の修行所）に火柱、続いて泉岳寺、慶應義塾大の図書館、増上寺と一直線に焼夷弾により焼きつくされた。この時、親友のお母さんが死亡、お姉さんが大火傷を負っている。後に高輪台小学校が軍部に接収された。屋上に高射機関砲があったためと聞かされた。その10日ほど後、空襲警報のサイレンと共にB29がまっすぐ向かってきた。「退避」と言われた時、高射砲のさく裂と共に機体が大きく傾いた。折からの北の風により焼夷弾は氷川神社周囲を完全に焼きつくし、親戚2軒が命からがら避難して来た。

戦後、旧東海道二本榎通りは130軒からの商店が並び、「高輪町栄会」として発展して来た。しかしバブルにより転居する人が多くなり、戦前からの商店は今10軒に満たない。江戸時代からの名残は円真寺、承教寺、広岳院、丸山神社など寺社ばかりである。

しかし、高輪消防出張所の前に、私が生まれる前からずっと生き続けてきた二本榎地名由来の榎が、今もこの世を見続けている。

私の空襲体験

小出千代子さん（90歳）

大正14年3月生まれの私は終戦の年、20歳でした。5月に赤坂に焼夷弾が落ちて、我が家が全焼し、数か月後に終戦になった時も、ずっと赤坂に住んでいました。NHKで放映されている終戦特集などの語りを聞くと、どの空襲も同じようだったと思ってしまうと思います。数字的記録も有り、記録映像も残っているのだから結果を振り返れば事実になるのでしょうが、戦争を体験した者としては、終戦の季節がきて特集番組が放送される時、伝え方にいつも違和感を感じていました。しかしながら、このような機会に、今でも鮮明な70年前の記憶を伝えられればと思い応募いたしました。

昭和20年5月23日に、赤坂見附の地下鉄のそばに焼夷弾が落ちました。付近にいた人は地下鉄の中に逃げ込みましたが、60名以上の方が犠牲になりました。3月10日に東京下町に大空襲があって、多くの死傷者が出て焼け野原になったことは聞いていましたので、赤坂が空襲されたら逃げるしかないと思っていました。でも、いつどこを攻撃されるのか分からないのですから、逃げる準備なんてできません。翌24日の夜中から、空襲警報は鳴り止みませんでした。空襲は、下町大空襲のようにじゅうたん爆撃ではなくて、焼夷弾の落とし方もポトン、ポトンと間隔があるのです。落ちた所は避けるようにして逃げるのです。焼夷弾による火災は燃え広がるまでに時間があるので、近づかなければ歩いて逃げることができました。それまで随分と消火訓練をしていましたから、焼夷弾が落ちると、すぐに消火作業を開始しました。しかし、訓練どおりやっても消火できないのです。とても無理だと思ったのでしょうか、消火の指揮をしていた隣組の組長は、ただ逃げる指示をして、いなくなってしまいました。近所のおばさんは、がけのさくの前までよじ上って近衛歩兵第三連隊のところまで行ったのですが、中の将校が抜刀して「敵はここを目標にしているのだから来ては駄目だ」と言われて、がけを下って戻ったそうです。私たち姉妹は幼い弟

たちを連れていたので、何処へ逃げてよいのか分からず、軍隊が掘ったがけ下の防空壕に入ってしまいました。防空壕は今の赤坂五丁目交番の横から三分坂の手前まで掘られていました。その日まで防空壕には「絶対に入っては駄目だ」と言われていましたから、入ったことはなかったし中がどうなっているのかも知りませんでした。まだ空襲警報は鳴り続けていましたが、少し落ち着いたころに、防空壕に煙が入ってきたのです。中に避難していた人たちは外に出ざるを得なくなりました。最初に出た人たちは、どちらに逃げてよいのか分からないので、ただ歩いていました。アメリカ大使館なら安全だと思って向かい始めましたが、氷川神社の中まで来たら、顔がすすだらけの女性の方が、アメリカ大使館の隣も燃えていると教えてくれました。途方に暮れてしまいました。いつも町内会では、何かあったら「最後は青山墓地に逃げろ」と言われていたので、弟たちを連れて向かうことにしました。乃木国民学校の塀の外まで火がきていたので、そばにあった用水桶の水を防空頭巾にかけて走り抜けました。学校を過ぎると燃えていなかったのに、乃木神社に入ったら拝殿が燃えていたので、神社が燃えてしまうのでは、青山墓地まで逃げてもしかたがないと思って馬小屋の所に行きました。そこは火の気もなくいつもと同じでした。もう青山墓地まで行かなくてもよいと思いました。空襲警報が解除になったのは夜も白けたころでした。逃げて来た方向を見ると、延焼で人家はほとんど真っ赤になって焼けてしまったように見えました。

大空襲

椎名武司さん（77歳）

あれから70年！　昭和20年5月25日の深夜、両親にたたき起こされ家を飛び出しました。芝中門前二丁目9番地、現在の芝大門二丁目7番、目指すは芝公園の防空壕、直線距離で300メートル弱あります。6歳7カ月の私は、着の身着のまま一人で走りました。

空を見上げると、深夜なのに空一面真っ赤に染まり、北風にのって火の粉が流れていく様は、筆舌に尽くせません。防空壕に入って数時間、空襲警報解除のサイレンが鳴り表に出た時、真向かいの増上寺の御霊屋がものすごい音と炎で燃えさかっているのを目のあたりにした時、身動きできずに眺めていました。

夜が明け、母と妹4人で栃木の上都賀郡上日向（現・鹿沼市）という所に疎開しました。そして4月にその土地の小学校に新1年生として入学し1年間過ごしました。

思いかえすと、防空壕まで逃げる途中、B29（爆撃機）らしき飛行機が2～3機飛んでいるのも目撃しています。そして五重塔の3階付近に焼夷弾が当たり火を噴いている光景も見ました。この時の空襲では山の手一帯が焼け野原になったそうです。

戦争とはいえ、民間人が何故このような被害を受けなければならないのか疑問です。戦争の本質が間違っているというより、戦争そのものを否定しなければなりません。

港区での空襲体験

杉山晃さん（88歳）

私はこれまで、自身の空襲体験については家族や親しい友人たちにしか話したことがありませんでした。今回の記念冊子の発行にあたり、私の貴重な体験を少しでも多くの人に知ってもらい、後世に語り継ぐためには、文章として書き残すことが必要であると思うに至りました。

昭和20年5月25日夜、空襲警報が発令された後にいつものように私は両親と3人で庭先に作った防空壕に避難していました。当時は毎日のように米軍機による空襲があり、単に偵察だけで終わる警戒警報と、偵察した後に続けて空襲される空襲警報とに分かれていました。

その日は防空壕の中に居ても、今までと違う異様な雰囲気が感じられたので、時々外をのぞくことにしました。すると夜半なのに空が明るく、今までの空襲の時とは違う様子が分かり、すぐそばにあった立木の楓の葉が燃えていることに気付きました。外に出ると4メートル道路を隔てた近衛歩兵第三連隊の兵舎が赤々と燃えているのが目に入りました。

両親は危険だから外に出るな（防空壕に入っているように）としきりに注意しましたが、私は今までと状況が違う旨を説明して3人そろって防空壕から外に出ました。手作り木製の桟を防空壕の蓋の上に置き、シャベルでその上に土を掛け内部に火が入らないようにしてから、バケツ1個に水を入れてぬぐいを1本持って家を出て、曲がりくねった路地を通って青山通りに面した赤坂区役所（現・赤坂地区総合支所）までたどり着きました。

青山通りは火の海で、大勢の人々が青山一丁目から赤坂見附方面に向かって避難していました。ふとんを大八車（大きな荷車）に乗せて避難した人たちが、ふとんに火がついて燃え出したために道路上に放置したことで道路が火の海となり、その熱風に背中を押されて、赤坂見附方面に逃げるしか選択肢がなかったのです。

途中東宮御所の裏門の木戸が開いていて、私たちを含む大勢の人々が御所の緑の中に避難することが出来ました。

警備中の兵士から消火に必要だからとバケツを提供するように言われ手渡しました。御所内の建物も立木も燃えているのが見えました。

夜が明けて薬研坂（現・赤坂地区総合支所の近く）まで戻り、そこから眺めた光景は今でも忘れられません。辺りは一面の焼け野原で、当時は高層ビルが少なかったためか新橋辺りまで広々と見渡すことができ、もしかして自宅は焼け残っているのではないかと思っていたいちるの望みは一瞬にして奪われてしまいました。自宅の焼け跡に戻り、敷地内だけで15本はあった焼夷弾の筒を触って火傷したことを思い出します。野球のボールが1個井戸の中に浮いていたり、庭に在った体操用の鉄棒がその支柱2本が焼失したために地面に転がったりしていました。それから4～5日の間は焼け跡の自宅敷地内でゴザを敷き、柱を立てトタン板を屋根にして過ごしていたのですが、その際入隊していた小学校時代の先輩がおにぎりを持って見舞いに来てくれたのは大変うれしい思い出です。

防空壕の中で焼け残ったふとんや衣類と、地下に埋めてあった瀬戸物の食器類も当時の生活に充分役立ちました。

記録によると、5月25日から26日にかけて波状攻撃で来襲したB29爆撃機は502機に及び芝、麻布、赤坂、渋谷、四谷、淀橋の各区に甚大な被害を与えた、と記載されています。

私はこれらの体験を文章にするのは初めてでしたが、書き終えるのにそれほどの時間は掛かりませんでした。記憶をたぐり寄せる作業に時間を要するまでもなく、とても鮮明に当時の様子を思い出せたことに、私の中で戦争がとても大きな出来事だったのだと改めて気付かされました。「手記」の応募に当たり、大空襲によって負傷されたり、亡くなられた大勢の方々に対し、今一度心から哀悼の意を表したいと思います。

麻布十番の空襲前後噺

早川福一郎さん（86歳）

私が生まれた所は、麻布区坂下町、今の麻布十番二丁目で、麻布山幼稚園・南山小学校・都立城南中学校に通いました。

3月10日の下町大空襲の後、急に防火地帯を作ることになり、私の家は疎開区域の指定を受けて壊されることになり、家財等は川口の親戚に預け、身の回りの物だけもって山元町のNさんの2階を間借りし引っ越しました。

疎開工事はすぐ始まり、賢崇寺の崖下から都電通りまで50メートル位の幅で空地ができました。

そして4月15日の夜8時ごろ、空襲が始まりました。

外で見ているとB29が飛んできましたが、先頭の数編隊は通り過ぎ、その後のB29から焼夷弾が落とされました。火の玉が釣鐘状にしだれ花火のように降りそそぎ、「あ、落ちた」と騒いでいるうち十番通りの方向から火の手が上がり、熱風にトタンが吹き上げられ飛んでいました。火がひろがり始め危なくなってきたので、父の指示で私は弟と2人でリュックを背に有栖川公園に避難することにしました。仙台坂まで行くと坂は逃げる人が後から押し寄せるように坂の上に登っていきました。私たちは公園につき座り込み、うとうとと休んでいましたが、そのうち夜が明けてきて、迎えも来ないので仙台坂を下り戻りました。坂の上から見た範囲では、三田から坂の左右は焼けた所は見当たりませんでした。家も残っていて、疎開区域で火は止まりました。父も家を壊されましたが「お役に立ってよかった」と言っていました。

昼食後に階下のNさんが焼け跡を見にいこうと訪ねてきて、一緒に網代通りを十番通りに向かって歩きました。途中見渡すと芝公園の丸山まで一面焼け野原で、わずかに土蔵と風呂屋の煙突がいくつか残っているのみでした。十番通りに出てみると前方に南山小学校と城南中学校の校舎が焼けずに見えていました。

十番通りを四ツ角（小林玩具店と豆源のある交差点の所をこう呼んでいた）の方へ少し行くと、すぐ左側のがれきの中に火で曲がってしまった刀がありました。Nさんが引っ張り出して「長船だ」と声を上げました。何と、名刀といわれる備前長船の銘があったのです。何とか持ち出せなかったのかと惜しまれました。

更に行くと四ツ角の手前にタイヤが焼けて、座り込むようにトラックが止まっていました。荷台を見ると重なった木の箱があり、焦げた上の箱を持ち上げるとその下の箱に白い握り飯が詰まっていて、少し食べてみると焦げ臭くて握り飯のくん製のようでしたが食べられたので、もったいないからもらっていこうと、手ぬぐいに15個程くるんで持ち帰り、お粥などにして2日程の食事になりました。

幸い遺体には会わず良かったと思いました。

そのころ私は勤労動員で日本光学工業株式会社（現株式会社ニコン）の大井製作所で軍艦に載せる測距儀（型式名YG立測）をつくっていました。仕事を終え省線（現JR線）の浜松町駅から大門で都電に乗り、中の橋を過ぎると十番通り入り口の左角に電柱が一本焼けずに立っていて、その先端が線香のように燃えていました。防腐剤として電柱に注入されたクレオソートのため燃え続けていたのでしょう。日ごとに高さが低くなり1週間程で地上まで燃えつきました。

当時城南中学では防護団を編成し、毎夜8名程が学校へ詰めていました。私は十番空襲の時は非番でしたが、次の日曜日に登校出来る者は集まることになり、私は学校へ行きました。

すると校庭・屋上には焼夷弾の残がい（太さ10センチメートル位、長さ60センチメートル程の6角形の鋼鉄製）が落ちた跡が3～4メートル間隔で残っていて、集められた残がいは96、97個ありました。

空襲当日は、講堂の天井中央にあった明り取りのガラスを破り、1発だけ床まで落ち床が燃えたのですが、当直だった友人は先生の指示で並んで一勢に放尿し消火に成功しました。あの時は皆多く尿が出たと笑い話になりました。斜めに落ちる焼夷弾はなく、窓から室内には入らなかったので、学校は焼け残りました。

余談ですが焼夷弾の残がいの底の方には燃え残った油が入っているものがかなりあり、これを薪につけるとよく燃え便利でした。またケースの鋼板も切ってナイフにするとよく切れました。

私は5月になり小田原に引っ越しましたが、動員先の日本光学工業株式会社には汽車で通っていました。

しかし5月25日の空襲で、山元町の家も麻布山も、焼け残った先がすべて灰じんに帰してしまったのです。

昭和19年8月～20年3月の芝区

松尾正恵さん（84歳）

昭和19年8月、弟が南桜国民学校から、学童疎開で、栃木県鬼怒川温泉「きぬ川館」へ先生、級友と行きました。数日後、母が私に、「男の子は天子様の子、お上が東京は危ないから疎開させろといえば、疎開させなければ。女の子は私の子だから一緒にいてね」と言い

ました。秋になって、米国機が、午前10時ごろになると富士山を目指し、東京方面に来るようになり、「定期便」と言っているうちに、東京の上空で空中戦、東京湾に……とはいかず、高射砲が撃たれました。しかし、青空に白い花が咲くものの、なかなか当たらないようでした。当たれば、その飛行士は死ぬ……。我が家は、モルタル2階建てで、近隣の2階より高くて、東側の部屋からは、空がよく見えました。建物を建てた大家さんが、関東大震災の時屋根がわらが危険だったとかでトタンぶきです。高射砲の音が屋根に響き、とても長くはいられません。陽当たりのよい2階での生活から、1階の隠居部屋に移りました。

爆弾が遠くの立川に落とされた時は家が揺れ、冬になると空襲は、夜にも行われました。その度、どこかで被害がありましたが、「芝区で焼夷弾での延焼が小さいのは、震災後の区画整理で道路の幅が広くなったから」と、大人が言っていました。

我が家の防空壕は、玄関の廊下の板を切って、地下に穴を掘ったもので、2、3人が入れます。空襲のサイレンが鳴ると、私はすぐ入りましたが、大人はなかなか入りません。

「戦争を止めると、おいしい食物が食べられる」など、数種の「ちらし」が米機からまかれたこともありました。

昭和20年3月9日の夜、空襲になり、母と2人、家の防空壕に入りましたが、母が「外の通りで、いつになく人の声がする。見てくる」といって、出て、すぐ帰ってきました。「出なさい。いつもの空襲とは違うようよ」と言い、道路上につくられた、佐久間町側の壕に入れてもらいました。

「子どもは、真ん中にいなさい」と男の人の声。その時、右側の女の人たちが、「爆弾だ!」「小さくなれ!」などと叫びました。

後で分かったことですが、南桜国民学校の東側のおふろ屋さん、ここは、強制疎開になった所で、隣組の人たちで建物を壊し、材木を並べていたのに、大穴が開いているのを次の日見ました。

爆弾が落とされたことで男の人が「子どもはここは危ないから、日比谷公園にお母さんと行きなさい」と言い出し、他の人にも勧められたので行くことにしました。昼間配給になったお米を、私が持っていきました。新橋から虎ノ門への大通りは、人っ子一人通らない暗い道。それを渡って、公会堂の側の東入り口近くの大木の下の防空壕に荷物を置きました。近くの壕に1組の男の人、公会堂には兵隊さんがいるとか、声が聞こえます。B29の爆音が聞こえ、暗かった空が明るくなります。南へ行く都電通りの先の方が時々赤く明るくなります。消防車がサイレンを鳴らして、どこかへ行きます。公園の中は静かです。

母が「家を見てくる」と言い、「もしもここが爆撃されたら、家の方も同じ。今、西の方は暗いから、阿佐ヶ谷へ行きなさい。親戚の家で会いましょう」と言って家に戻って行きました。東側は、道路の向こうの高いビル(5階位)でよく見えませんが、上の方まで赤くなっています。南は、明るい色が強くなったり、暗くなったり。そんなことを、繰り返して、あたりが白く明るくなるころ、母が迎えに来てくれました。「家は焼けなかったわよ。帰りましょう」。もうお米は持てませんでした。

次の日学校へ行くと仲良しのKさんの家が浜松町で焼け、神明国民学校に避難していると聞き、友人に連れていってもらいました。途中、大門の銀行前の階段の黒い輪を指さして、「自分が家族と芝公園に避難する時、男の人が座っていたの。帰る時もいたが昨日は居なかった」と教えてくれました。

学校で、話題になったのは、新橋の土橋のお堀に死んだ人がいること。私の家は近いので、行ってみました。現在は上に高速道路、1階と地階は商店になっている所です。当時は、今の地下に、隅田川から水が入っていました。私が行った時、髪が抜け坊主頭になった、もんぺをはいた女の人らしき人が水にゆられ、亡くなっていたので、そっと手を胸のところで合わせました。母に言ったら「若い、これからの人は見ないこと」と注意されました。

三月十日

松苗政一さん(79歳)

昭和19年、疎開に伴う処置として、都内全域の新築、増築に制限がかかった。

昭和20年、神谷国民学校(現・北区神谷小学校)では卒業式を3月上旬に終え、すでに決められていた生徒たちから順に、学童疎開が開始されていた。そのとき僕は、小学3年生であった。

僕は、たまたま縁故疎開が決まっていて、父の都合で3月の終わりころまでには、祖母のふるさと福井県に疎開することになっていた。

父は町のベアリング工場に勤めていたが、徴用の通知が来て、亀戸の軍需工場で働いていた。

月、月、火、水、木、金、金、と歌われていたように、そのころの軍需工場では、休みなどほとんど取れないのが現状であった。そのうえ勤務のほとんどは泊まり込みで、母は3日にあげず、洗濯物を父に届けていた。

ある日の午後、母は婦人会の集まりがあり、洗濯物を僕が届けるはめになってしまった。「今からだと日も暮れて、空襲に遭うかもしれないから、今日は泊めてもらって夜が明けてから帰ってきなさい」と、母に言われていた。当時の身支度といえば、下駄履きに足袋、ゲートル巻きでどこへでも出かけた。

夜7時、工場の浴場で作業が終わった父と一緒に風呂をあび、その後夕食をとったが、夕食とは名ばかりで、米はほとんど入っていない雑炊である。食後父は、また職場へ戻ったが、ここでは娯楽施設は言うに及ばず、漫画本などもほとんどない。夜勤を終えると、若者たちは錦糸町などに出かけ、屋台をひやかして歩くことぐらいしかなく、ほとんどの若者はおしゃべりに飽きると布団にもぐりこんだ。

宿泊所で睡眠をとっていた僕の意識のどこか遠いところで、サイレンが鳴ったような気がした。やがて工場の空襲警報のサイレンと同時に、「退避、退避」と叫ぶ声があわただしく廊下を駆けぬける。父は跳ね起きると、「防空壕へ入って待ってろ!」と言うと、工

場の方へ駆けて行った。

毎日の空襲には、すっかり慣れっこになっていた僕は、ゆっくりと床の上に身を起こし身支度を調えた。2、3日まえに雪が降り、その夜の冷え込みはことのほか身にしみた。

ゲートルを巻き外とうをはおる。作業帽の上から防空頭巾をかぶると、内ポケットの財布を確かめ防空壕へ向かった。……そして、思い切り伸びをしながら息を吸い込み、ふと空を見上げて僕はギクリとした。

深川方面の夜空が真っ赤に染まり、すぐ近くからも火の粉が舞い上がっている。僕は、事務所脇の外階段を駆け上がると、屋上に出てみた。両国から深川方面にかけて火の海である。とっさに軍需工場は危険だと思った。

階段を駆け降りる耳元で、シュルシュルという音と共に焼夷弾が降ってくる。僕は夢中で駆けていた。大通りへ出て見ると、あたりは赤々として明るく、リヤカーを引っ張っている人、荷物を背負って子どもの手を引いてうろうろしている人、炎にあぶりだされた影はゆらゆらと揺れて、走馬燈でも見ているような錯覚におちいる。

地上からは炎は幾条にもなって立ち昇り、その炎をかいくぐるように人々が逃げてくる。平井の方角から炎が上がると、細い道から掃き出されるように人々が大通りに集まってくる。群れになった人々は突然両国方向へ逃げたかと思うと、また戻ってきて平井方面へ逃げる。僕はそのありさまをみていて、「あの人々とは行動を共にしたくない」と思いはじめていた。

焼夷弾はあらゆる場所に落ちてくる。普通の火事とは違って、いま火の手が見えないからといって、そこもいつ燃え出すかわからない。この場合、燃える家が残る方角のほうが、むしろ危険だと思った。僕はいつのまにか人々と別れ、単独行動をとっていた。

そのころの大通りには角々に防火用水があった。僕は、外とうを脱ぐと、防空頭巾と共に、防火用水の水をたっぷりと含ませた。身支度を調えると、そばに転がっていたバケツを下げて深川の方角へ向かって歩きだした。前方を見ると、炎と煙はこちらの方面に向かってくるように思えたが、構わずそのまま進んだ。

しばらく行くと人々の群れのなかに、老夫婦と思われる男女の後ろ姿に出会った。

「お父さん、お父さん」連れ立って逃げていた女房が、油煙で真っ黒な顔を振り向けたまま男の袖を強く引いて夫を振り返らせた。初老の男は僕と目が合うと軽く会釈をした。

吹きつける火の粉と風の中で、女房はすがるような眼差しで、夫と僕の顔を交互に見ていた。老女の表情からは、僕を連れて逃げるべきか、それとも自分たちだけで逃げるのか？夫の表情をうかがっているようだった。周りには親子づれや女がほとんどで、僕のように一人で逃げている子どもはめったに見られなかった。

火はますます強風にあおられ、人々に吹き付けてくる。深川方面から来る人と両国方面から来た人が橋の上でぶつかり合い、狂気のように押し合っていた。すでに荷物や女の髪の毛にも火がついていた。

念仏を唱えるもの、お題目を唱えるもの、まるでその光景は幼児のころに見せられた往生要集の地獄絵そのままである。

方向を転じて前方を見れば、焼けついたアスファルトの上を、赤ん坊をおぶった母親と男の子が、まだるっこいほど緩慢な動作で駆けている。炎に照らし出された車道のうえに運動靴の足跡が点々と続き、その先を駆けていた男の子が突然バサッと倒れた。

半狂乱になって駆け回る母親の背中には、火のついたねんねこの中で、赤ん坊が首を後ろにそり返らせたまま燃えている。もう誰にもどうすることもできなくなっていた。

僕は自分も焼け死ぬだろうと思った。防火用水から水をくみ上げ、頭からかぶると、燃えている方角へ歩きだした。寒さを心配して外とうを着てきたことが、炎から身を守ることに役立った。

炎に道がふさがれると、他の道を探した。場合によっては火を避けるため、川に身を沈めた。辺りを見ると、顔面を焼かれた死体が浮かんでいる。川の中だからといって安全だとは限らない。……やがて炎が下火になった方角を見つけ、川からはい上がる。

幸い公園や、焼け跡もあって、炎の少ないところを選って歩くことができた。途中背中に大火傷をして、うずくまっている女がいた。生きているのか死んでいるのか見当もつかなかったが、持っているバケツの水をかけてやった。

進むにしたがって黒焦げの死体が多くなる。もう誰も僕のあとについてくる者はいない。まぶたと鼻腔が焼け付くように痛む。風向きが変わると、防火用水から水をくんで頭からかぶった。菊川町あたりにきたとき、猛烈な熱風と炎に押し戻された。後ろを振り向けば先ほど我慢をして歩いてきた方角は、一面火の海である。僕はもうどうなってもいいと思った。

頭からバケツをかぶり、炎の隙間を選って走り続けた。走っては転び、また走っては転んだ。どのくらい走っただろうか、一瞬冷たい風がほおをなでたように感じた。

目の前に黒い空間があった。公園のようだ。……公園にたどりつくと急に腰の力が抜け、へたへたと腰を落とした。

目と鼻に焼き付いたような痛さが戻ってきた。軍手を取ると砂をほじくり、砂で顔を洗うようにして皮膚を冷やした。「水がほしい」そう思うと矢も盾もたまらず、ふらふらと立ち上がり公衆便所をさがした。やがて行く手に、手洗い所の水が細く糸を引くように光っていた。

蛇口に口をつけ、仰向けになりながら水を飲む。盛りを過ぎた火の海から、青白い煙が夜空に昇っていく。恐怖もなければ憎悪もなかった。ただただ疲れ果て、時間が長く感じられた。

膠着した僕の脳裏は漠然として、まるで夢でも見ているようにゆらめいて、とりとめのない幸福さえ感じていた。

どのくらい時間がたっただろうか、暗い夜空が少しずつしらみ始めた。

3月10日の夜明けである。

B29（出典：『写真週報』336号、提供：アジア歴史資料センター、国立公文書館蔵）

真っ赤な空

村井惠美子さん（83歳）

昭和20年3月10日未明、いきなり空襲だ。「イッチャン、惠美ちゃん早く下りて来なさい」。母ちゃんの呼ぶ声で窓を開けて、西か東か分からないけど真っ赤な空にB29が編隊で飛んで、焼夷弾が風に吹かれて我が家に降って来た。3人で階下におりた。「そうだ忘れもの」と2階にまた戻り、ふろしき包みをかかえて階下におり、振り向くと階段が焼け落ちた。危ないところだった。モンペの左足に火がついていた。イッチャンが手ぬぐいで払ってくれたので火傷もなかったが、一歩間違えば火だるまになるところだった。

イッチャンとけんかしながら三光小学校に避難する。3人で学校にむかった。途中、リヤカーを引いた人、頭から血が出ている人3人を通り越して行く。やっと学校に着いた。母ちゃんを捜す。うろうろしていると隣組のおばさんに、「母ちゃんあそこにいる、早く行きなさい」と言われた。母ちゃんと妹弟がいた。婦人会の人がおにぎりとみそ汁をもって来てくれた。

イッチャンが母ちゃんに「おばさん、下駄」と言って懐から下駄を出して渡した。母ちゃんはスリッパをはいていた。イッチャンは「やっぱり持って来て良かった」と言った。「何で下駄持ってんの」と聞かれ、「よく覚えていないけど誰かにあげてもいいじゃん、でも役にたてて良かった」と答えた。母ちゃんが、「父ちゃんは、消防団なんで逃げ遅れた人たちを誘導する仕事だから、終われば来るからね、皆で待っていよう」と言った。でも母ちゃんはいつもと違う。いつもは大声で子どもたちを追いかけ回したりすごい元気なのに。2人の弟は学童疎開、残り4人の幼い子、それに14歳の私、ねえやのイッチャン。母ちゃんは父ちゃんの替わりに皆を守らなければいけなかったんだろうなと今思う。

もうこんな恐ろしいことは嫌。

地方での空襲体験

匿名希望（83歳）

私が父親や姉2人妹1人の4人の命と、家屋財産を一夜のうちに失くしたのは、昭和20年7月1～2日にかけて、アメリカ空軍のB29爆撃機によって熊本が空襲をうけた時でした。

当時私は中学1年生で、一緒に住んでいた家族は父親母親、姉2人妹1人と私の6人家族でした。兄はすでに支那事変（日中戦争）で戦死していました。

当日、空襲警報のサイレンの後、B29爆撃機が飛来し空襲が始まりました。木造家屋が燃えやすいように油が入った焼夷弾がスダレのごとくザァザァと降ってきました。庭の中に安全のために防空壕がつくってあったのですが、周囲が火の海になってからでは逃げおくれると、6人全員で安全な場所を求め、家の中を通り抜け表の電車通りへと向かったのですが、私と母親は途中で2階を貫いて落ちてくる焼夷弾にはばまれ、父親たちと一緒に表通りに向かえず、庭の方に引き返しました。庭には杉や檜の木が植えてあり、火の回りが遅く、逃げることができたので、近くの小川の中に一晩中つかることにしました。小川の中では逃げてきた近所の方たちと一緒に、流れてくる火がついた油を防ぎながら過ごしました。夜が明けて周囲を見ますと一面焼け野原になっていました。

私と母親は父親たちを探しに自宅の焼け跡にもどりました。焼け跡についた瞬間見たのが、父親たち4人の焼死体だったのです。「なんで」と、ただただぼう然とするばかりでした。信じることができず涙も言葉もでませんでした。表通りに向かった父親たちは、アスファルトと油で燃えさかる道路に逃げ場を見いだせず、庭の方に引き返してきたのだと思います。しかしその時すでに遅く、庭も一面の火の海だったと思います。杉や檜の木も焼けこげてなくなっており、逃げ場が失くなった姉妹3人は手をとり合い、父親は両手を胸にあわせ亡くなっていました。遺体は検死が終わるまで動かせないとのことで、焼け残りのトタンを拾ってきてそれぞれの遺体にかぶせ一日一晩過ごしました。

2日目だったと思いますが、あちこちの遺体を積んだ大八車がやって来て、父親たち4人の遺体もその上に積まれました。母親と2人で大八車について行きました。近くの山だったと思いますが、横に掘られた穴に順々に埋葬されました。後日のことを考え、父親たちの足首に目印のための布きれを巻きました。数日後目印の布きれを目当てに掘り起こし、火葬し、遺骨を先祖代々の墓に埋葬することができました。

どんなに苦しい思いをして死んでいったと思うと悲しみがこみ上げてくるばかりです。ただ4人のめい福を祈ることしかできません。

最後に、多くの人々が自分の意思に関係なく命を奪われ、死んでいかなくてはならない戦争は、絶対に反対せざるを得ません。

昭和20（1945）年5月30日、空襲で焼け野原となって市電も止まった東京の市街地を行き交う人々や牛車（提供:共同通信社）